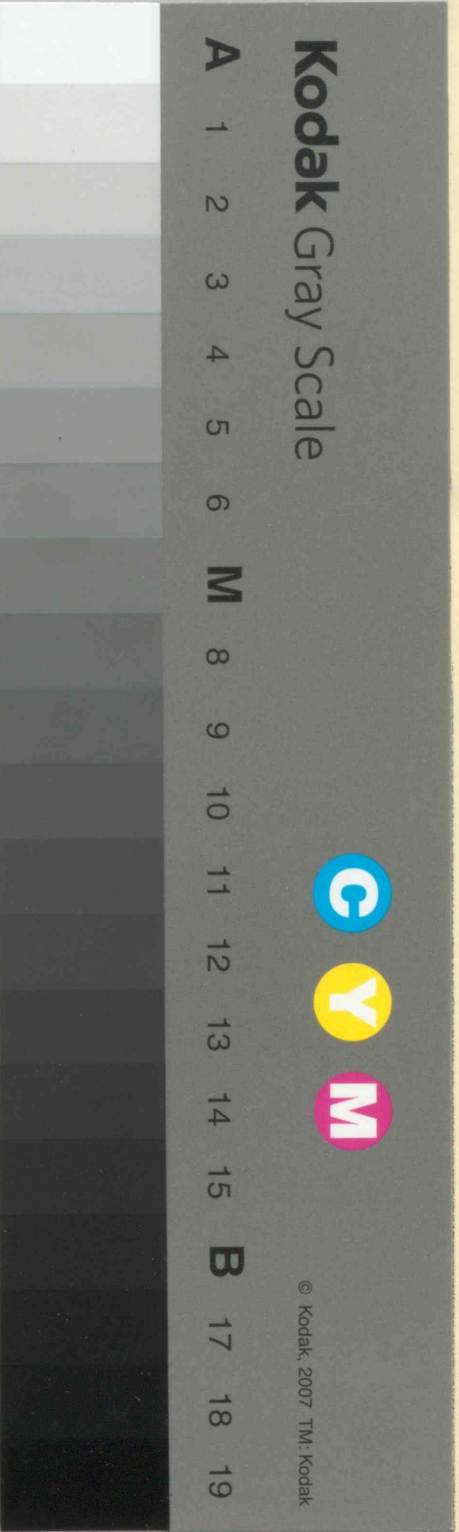
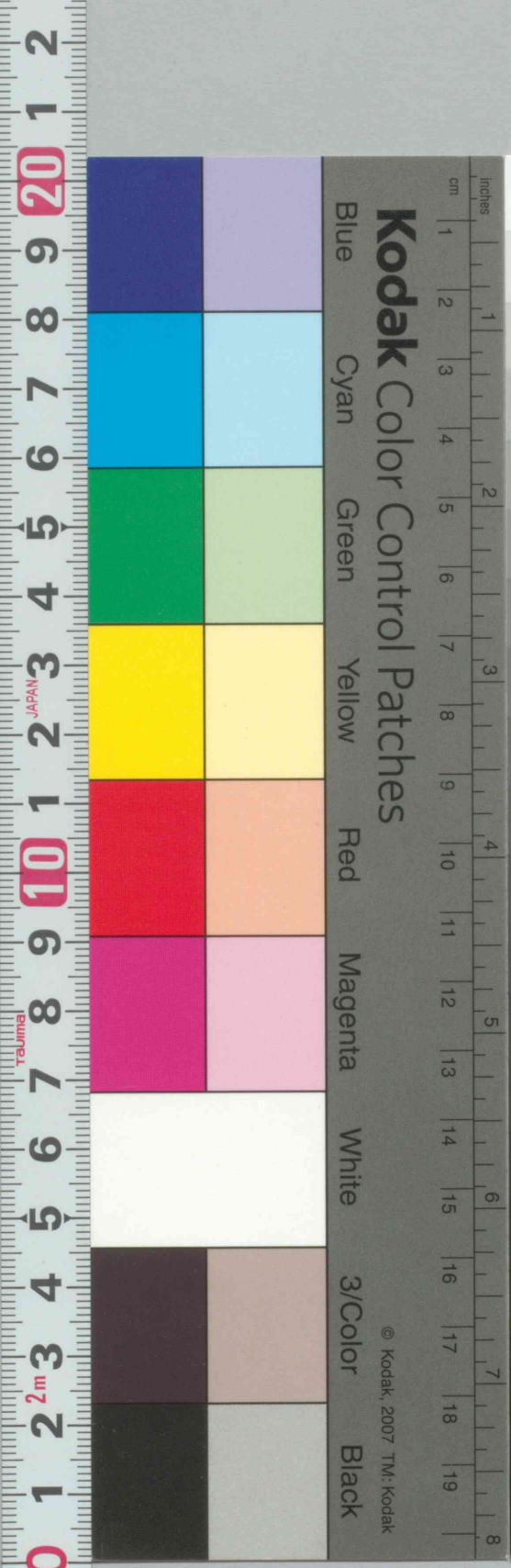


中國文教科書

卷二

3759
Y019
資料室



41759

教科書文庫

4
810
41-1934
20000
42769



資料室

375.9
Y019

文部省檢定濟

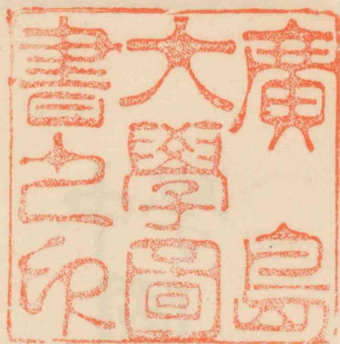
昭和三十九年十二月二十六日 中國語文教科用

吉田彌平編
中國文教科書 卷二

東京 光風館藏版

修正二十三版

中國文教科書
吉田彌平編



中國文教科書 卷二

目次

一	この君この民	石黒忠憲	一
二	日章旗	中西悟堂	九
三	高原の秋	豊島與志雄	二二
四	大蘆原		二八
五	月の天橋	徳富健次郎	三〇
六	小さな旅人	薄田泣菫	三五
七	形見の鎧	八波則吉	三三

八	阿閉掃部	室鳩巢	四一
九	ポチ	長谷川二葉亭	四五
一〇	サフラン	森鷗外	五四
一一	山陽と法海	南條文雄	六三
一二	秀吉封冊を退く	頼山陽	七〇
一三	シベリヤの旅	新妻莞	七七
一四	浦鹽より	太田覺眠	八三
一五	傳書鳩	小野賢一郎	八八
一六	新年山	千葉胤明	九六
一七	雪	堀口大學	一〇一
一八	野口英世		一〇四

一九	心の洗濯	柴田鳩翁	二八
二〇	近江聖人	橋南谿	三四
二一	春待つ心	相馬御風	三〇
二二	鎌倉	正岡子規	三三
二三	眞劍勝負		三八
二四	山田長政	齋藤拙堂	四五
二五	ローソップ島の日食	服部忠彦	五三
二六	伊能忠敬	幸田露伴	七三
二七	死して惜しまるゝ人となれ	嘉納治五郎	八〇

一	この君この民	石黒忠恵
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十



中國文教科書 卷二

石黒忠恵
陸軍軍醫總監
樞密顧問官
子爵

弘化二年(一八〇五)
越後國(新潟縣)
生
魚隱洞
黄海道にある
兀浦
平安北道にある

石黒忠恵

明治二十七年十一月二日、私は征清軍の醫務視察のため朝鮮の魚隱洞を出帆して、翌三日兵站司令部のある兀浦についた。司令官は陸軍少佐山縣俊信君であつた。私がその巡視を終へ、次の目的地に向けて出發しようとする、閣下暫くお待ち下さい。今日の天長節に、こゝへお出で下さつたことは、實に有難う存じます。現在こゝに居る

ものは、將校下士軍夫合計八十三人でありましたが、正午には全部残らず山の上に登り、盃を舉げて大元帥陛下の萬歳を祝し奉らうと存じます。閣下、どうかこの音頭取をして下さい。

と山縣司令官がいふから、私も大いに喜んで、それは結構ぢや、此方から願つても致したい。馬を休ませ、頭のつかへるやうな廠舎へ潜り込んで、時の來るのを待つてゐた。その内十一時になつた。司令官に導かれて山の上に登つて見ると、兵站部で用意した酒が一樽鏡が抜いてあり、又焼鯛を裂いて策に堆く盛つてあつた。たゞそれきりで、外には何も無い。すると、山縣司令官があ

わたゞしく、どうも困つたことが出來ました。これまで用意は致しましたが、肝心の酒を飲む盃がありません。と、如何にも當惑さうな様子。なるほどそれは困つたと私も思つて居ると、司令官は忽ち手を拍つて喜んだ。

天佑、天佑。濱邊へ行くと牡蠣の貝が澤山ある。閣下究竟の盃が見つかりました。すぐ從卒に命じて、牡蠣殻を拾ひにやつた。暫くたつて、二人の從卒が策に一杯づつの牡蠣殻を綺麗に洗つて持つて來た。時計はもう十二時に近い。皆山上に整列した。すると、山の下から一人の軍夫が駈上つて來た。

お待ち下さい。お待ち下さい。

見れば手に日の丸の旗を持つてゐる。どうしたのだらうと、一同の視線はその軍夫に集注した。やがて軍夫は私の前に立つて、その日の丸の旗を差出し、

閣下、これを持つて音頭を取つて下さい。

といつて、旗を私にくれた。私はすぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、東の方日本に向つて、謹んで「大元帥陛下萬歳」を三唱した。皆がこれに和した。

その時振つた旗を取つてよく見ると、これは驚いた。半紙に梅酢で紅く日の丸を染めたもので、處々にまだ紫蘇の葉が着いてゐる。その紙を飯粒で細い竹に張附けたのであ

つた。

大本營
廣島市の舊廣島
城内に設けられ
てあつた

川上

名は操六
陸軍大將
子爵
鹿兒島縣の人
明治三十二年(三
五)薨
年五十四

寺内

名は正毅
元帥
陸軍大將
伯爵
山口縣の人
大正八年薨
年六十八

私はその牡蠣の貝と梅酢の旗とを鞆の中に入れて持歸り、大本營に於て、御前にこの事を奏上して、右の二品を天覽に供し奉つた。天皇はじつとそれを御覽になつていらせられたが、そのうちに、恐多くも御眼に涙を御催しになつたやうに拜し奉つた。それを拜して、御前に列してゐた私は勿論、川上も、寺内も、みな感極まつて泣いた。梅酢で旗を染めて聖壽を千里の外に祝し奉るといふ臣民があれば、これを御覽になつて御涙を催させ給ふ君主があらせられる。私はその刹那にひしと胸を打たれた。この君あり、この民あり、我が日本帝國は萬歳である。今になつてもこの事を思

ひ出す毎に、私は實に感激に堪へない。それから、まだ恐れ入つたことがある。私が謹んでこれらの事を奏上し終ると、



山縣 俊信

その司令官の山縣といふのは、あの十年役の山縣か。といふ御下問である。

仰の如く、十年役に殊勲のありました山縣俊信でございます。

と申し上げた

これはどういふことであるかといふに、明治十年の役に勲

功のあつたものに對して、翌十一年にそれを行賞があつた。これが我が國で勲章の制が定まつて、軍人が武功によつて勲章を賜はつた始であるが、當時尉官は最上勲五等、佐官は勲三等といふことであつた。即ち大尉以下は勲五等に止つたのであるが、中に殊勲によつて特に勲四等に敘せられたのが、この山縣俊信唯一人であつた。爾來春風秋雨こゝに十八年、當人は既に隱退してゐたのだが、この戦役で召集されて、兵站司令官となつて出征したのである。然るに、天皇には今や卒然として、それは十年役の山縣か。との御下問なのである。恐れ入らざるを得ないではないか。幾ら軍功があつたにもせよ、一大尉の名を十八年間も御記

常陸丸
陸軍運送船
明治三十七年六
月十五日露艦ク
ロンボイ外二艦
の襲撃を受けて
撃沈された
將兵七百四十二
人も船と運命を
共にした
須知中佐
陸軍歩兵中佐須
知正武

憶あらせられるといふことは何といふ有難いことであらう。その晩、私は山縣に長い手紙を書いた。そして「この君恩の忝さを特に謹んで御傳へ申す」と書添へた。數日の後、山縣から返事が来た。その文意はかうであつた。十八年の久しきに及んで賤名を大元帥陛下の御記憶に留めさせ給ふとは、實に何とも申しやうなき光榮の至で、感激に身も戦く心地が致します。この君恩に對する御奉公は、必ず私一生の内に致す覺悟であります。日露戦役に於ける常陸丸の最期は、悲痛壯烈そのものであつた。その難に殉じたものの中に、輸送指揮官須知中佐と

並んで近衛後備第一大隊長山縣俊信の名のあつたことは、知る人ぞ知るであらう。山縣はこの役に再び召集されて近衛師團に入り、遂にこの悲壯な最期を遂げたのである。その時、山縣は恐らく大元帥陛下が十八年間我が名を御記憶下されたといふことを思ひ出し、感激に満ちて陛下の萬歳を唱へつゝ死んだであらうと、私は確信して居る。

二 日章旗

中西悟堂

秋日の朝の町を私はゆく。
日章旗のひるがへる町を、
晴々しい祝日の町を、

中西悟堂
詩人
明治二十八年(三
五五)金澤市生

私は心さわやかにあるいてゆく。

日章旗の何といふ純潔さ、

何といふ明朗さ。

私は祝日の国旗の美しさに心奪はれて、

皇子のやうに町をあるく。

町並のうしろに靡く青空、

青空にひるがへる日章旗、

何といふ博大な心を示し、

何といふ光明な心を表してゐるのであらう。

あゝ晴やかにうるはしく、

日章旗は町にひるがへる、
はたくと流れる朝風にひるがへる。

私は日章旗が語る心を始めて知り、

その光輝に心奪はれ、

その単純さ正しさに心奪はれ、

嬉々として爽かに

朝の町をあるいてゆく。

光榮の旗よ。

譽の国旗よ。

あゝ樹々の緑と、青空と、

明るい人々等の顔々と、

燦然たる日章旗とに飾られた祝日の町を、

感動に溢れ溢れて

私は揚々とあるいてゆく。(現代日本詩選)

三 高原の秋

豊島與志雄

私は或秋の初、日光の奥の湯元温泉に約二週間ばかり滞在した。十一月には、人は皆雪を避けて麓の方へおりて行くといふ山中なので、日當りのいゝ傾斜面にはまだ種々の花が咲いてゐるのに、野の草葉はもう霜枯れてゐた。霜枯の頃になると、山國の人の心は、何かしら、しめやかになつて、祈

豊島與志雄
佛文學者
明治二十三年
五月福岡縣生
湯元温泉
栃木縣上都賀郡
中禪寺湖の西北
十四軒なる湯湖
の北岸にある

願するやうな眼を空に向けるのである。

私は時々散歩に出た。

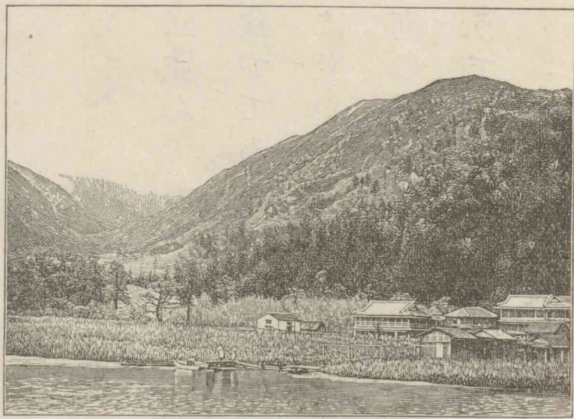
しかし、その散歩は、戸外の空気を吸ひたくなつて表に飛出すとい

ふやうな都會人の散歩ではなかつた。室に寝轉んで外を見てゐ

ると、向ふの高山の頂から雲が現れて、靜かに大空を流れてゆく。

その方向へ大氣が動いて、すべて

のものが流されてゆく。私もいつしかそれに流されて、野の間を歩いたのである。



日光湯元温泉

男體山
一名黒髪山
日光山中の最高
峯
中禪寺湖はその
南麓にある
戦場が原
廣表十二軒にわ
たる高原

湯元から二軒ばかり山道を下ると、男體山の穩かな姿を東方に仰ぐ戦場が原に出る。廣い平な高原の中には、恐しく澄みきつた空氣が靜かによどんでゐた。そして私の足も、そこまで行けば自然に止るのであつた。落葉松の大木が七八本すつくと立並んでゐる廣い高原の片隅には、牛の群が丈高い雜草を食つてゐた。小さな番人小屋の入口には、一人の女が日向に坐つて、小兒に乳をやつてゐた。その側を通つてゐる一筋の道が、高原の眞中を眞直に横ぎつてゐた。その道に沿うて、一軒の茶店の藁屋根が遠く野の中に見えた。

まふ。草を藉いて仰向けに寢轉ぶと、直接に私の上に空——高原で見られる、すぐ手に取れるやうな低い空——秋の澄みきつた冷やかな空——がある。そして、私の下にはすぐ大地——草木を枯らし、又芽ぐませる黒い土地——がある。顧みると、小さな兜蟲が私の顔のすぐ側に這出してゐる。じつとしてゐると、それは私の着物に這ひつき、肌に這ひよつて來る。たゞ私の方が、彼等より



原 が 場 戦

中禪寺
中禪寺湖
栃木縣日光山中
にある湖水
周囲二十三軒

もいくらか温い肌をしてゐるのみである。戦場が原の水は多く中禪寺の方へ吸取られるので、一般の高原に見るやうな濕氣がない。草は高く伸びて、牛の群が戯れるによく、羽の美しい甲蟲が這ひまはるによく、人が寢轉ぶによく、鳥が巢くふによい。じつと寢轉んでゐると、名も知らぬ小鳥が、つとわが顔を掠めながら空に舞ひあがつて、ちゝと囀る。

私は秋の澄みきつた大氣の中に、草の上に横たはつて、長い間じつとしてゐた。私の血管の中には、古い田野の神の血が流れた。私は最早人間の兄弟ではなくて、すべての生きてゐるもの、すべての生物の兄弟であつた。

私は牛の群を見た、牛飼の姿を見た、又遠く一軒の茶店の藁屋根を眺めた。冷やかな空氣がどこからともなく流れて来て、足もとの草葉がをのゝく。

雄大な姿をくつきりと空に峙たせてゐる男體山の山影から、それとも見えぬ靄が高原の上に流れ寄つて來た。この靄は、やがて西に傾く日脚の後を追つて、高原の上に濃く立ちこめてくるであらう。そして禿岩の上に霜をおき、草葉の上に露をおくであらう。遠くその高原を圍む山の頂を越えては、平地の上に夜の雲をかぶせるであらう。

私は逐はれるやうにして自分の宿の方へ歸つていつた。

(旅人の言)

四 大蘆原

佐佐木信綱

佐佐木信綱

歌人

文學博士

明治五年(三五三)

三重縣生

ゆきゆけば朧月夜となりにけり城のひむがし菜の花
の村

唐招提寺

奈良縣生駒郡都

跡村五條にある

南都七大寺の一

金堂・講堂など

は國寶

木下利玄

歌人

子爵

明治九年(三五六)

岡山縣生

秋さむき唐招提寺鷓尾しびのうへに夕日は照りぬ山鳩の
鳴く

木下利玄

あさの潮ゆたかに満てり切岸に上揺れ波の上り下り
すも

庭見れば土にしみ入りしみ入りてひえく雨の降り

出でしかな

川田順

川田順

歌人

明治十五年(三五五)

二東京生

くろくと佛まろべり薄き日のたゞよふ床ゆかのむしろ
の上

磯崎のそらを翔らふ鳶のこゑ松風のなかにとほりて

きこゆ

石樽千亦

石樽千亦

本名は辻五郎

歌人

明治二年(三五九)

伊豫國(愛媛縣)生

枯れて立つ大蘆原の蘆ごとに日のしみ入りて風なき
ゆふべ

顧みれば紀の群山は一つ色の一つ山となりて船志摩
に入る

天橋
天橋立
京都府(丹後國)
與謝海の中央に
突出してゐる砂
洲

長さ約四軒
日本三景の一
徳富健次郎

號は蘆花
文學者
肥後國(熊本縣)
生
昭和二年歿
年六十
切戸

京都府與謝郡吉
津村大字文殊と
天橋立の長洲と
の間の小海峡
この渡を文殊
の渡といふ

五月の天橋

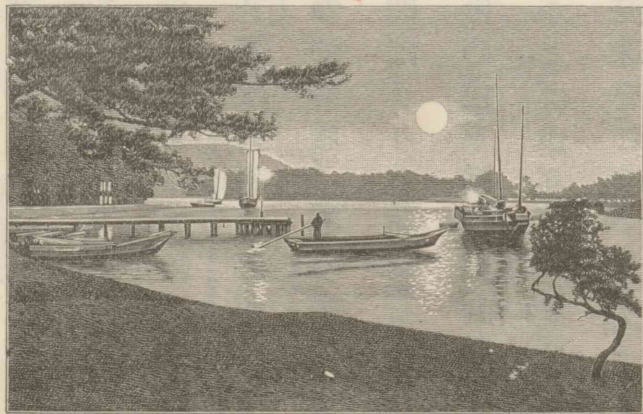
徳富健次郎

ぎいと艫が響いて、舟は墨染の濃い松影から、白々とした月下の海に出た。海というても浅い洲の水である。何といふ好い月夜か。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中に天あつて、そこにも月は壁の如く光つてゐる。何といふ清い水だらう。月明りにも、水底の砂が分明に數へられる。こゝは橋立切戸の渡か。若しくは天河をいま渡りつゝあるのではあるまいか。船頭よ、ゆるやかに舟をやつてくれ。もつと徐にやつてくれ。しかし、如何程徐に舟をやつても、彼岸は近い。舟はもうするくくと天橋の渚に着いてしま

うた。

舟からあがつて踏む白砂は、もう天橋立である。こゝらは植ゑついで間もないと見え、松は稚木で、疎らである。月光に雪と輝く砂を踏んで、だんくゝ奥へ入つて往く。歩むにつれて、松影はだんだん深くなり、はては月の光よりも松の影が多くなつた。何といふ明るい月だらう。仰げば松の一葉々々が白金のピンを數ふる如く讀まれ、俯く砂

ピン



月夜の天橋立

與謝の海

京都府與謝郡の内灣

天橋立によつて宮津灣と境してゐる

古くは宮津灣と與謝海とを併せて與謝海といつた

ベンチ

長椅子
共同椅子

ルビー

Ruby

にはまた一葉々々の影が黒く鮮かに讀まれる。松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋立に人籟絶えて、唯何處からともなく、ざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨もて描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐むる響に外ならぬのである。その響にひかれて汀に出て見る。そこに約二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海、その懷には壁の様な月を抱き、寐息かとはかりざぶり又ざぶりと白砂にこぼるゝ漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に、半圓形の山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣

宮津

京都府與謝郡宮津町

を縁どつてゐるのは、あれは宮津の町である。



天橋立

ふと此方の海の上に、不思議な物が現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ老大な横長いものである。龍宮城の出現——と見る間に、それは宮津の方へ動いてゆく。龍宮城が移動すると見たは、それは今日の最終の連絡船が宮津を指してゆくのであつた。やゝ暫くその行方を見送る。龍宮城はあの宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊にぴたりと着いてしまふた。

あとは唯慰したやうな與謝の海。照りまさる月の空と靜かに相見えて相抱き、一里の松原枝も鳴らさぬ天の橋立の長い汀にそうて、ざぶり又ざぶりと漣がさゝめくばかりである。

汀から松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくくと砂を踏む足音の絶間に、波のさゝめきが慕うて來る。幽かに蟲の音がする。松影は益々深くなつて、はては砂の上にこぼるゝ月影がちらちらと螢ほどに細く疎らになつた。と見ると、こゝにひつそりと鎮ります社がある。大方橋立明神といふのであらう。松影を浴びたその宮に人影もない、人聲もない。燈明一つともつてゐない。

橋立明神
天橋立の中央部
にある一小祠
祭神は豊受大神

余はその松に倚りかゝつて、やゝ久しく立つた。

大分たつてからである、歩を返して松影から月に出て、砂路をぶらりくと又切戸の渡に來た。切戸の水は全く天河の如く美しい。汀に立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い灯が見える。文殊の渡守が小舎の灯である。

「おーおーい」

渡を呼ぶ余の聲が震へて天河を渡る前、余は月の天橋の端に立つて、暫くその灯を眺めてゐた。死の蔭に

六 小さな旅人

薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋がふけて來ると、晴

薄田泣菫
名は淳介
詩人・新聞記者
明治十年(一九三七)
岡山縣生

れきつた空を、毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、



雁 過 筆畝寛木荒

雁よ、棹になれ。棹になつたら、鉤になれ。

と、その長い行列が次第に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることには、よくく人氣の遠い野原でもないと、めつたに見られなくなつた。

その頃は又、後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に小鳥が澤山来てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えて来る彼の小さな旅人のあわたゞしい旅を考へて、いつも寂しい旅心地を覚える。

まづ百舌が来る。秋の彼岸が過ぎて、日影がそろそろ黄色がかつて来ようといふころ、私たちは、どうかすると暖い日の午過、そこらの木立で、甲高い、鋭いその聲を聞くことがある。「あゝもう秋だな」と、思はずふりかへつて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて丈の高い楡の木に百舌が一羽止つて、黄色い夕日を受けて、羽が金のやうにきら／＼してゐる。私たちはその瞬間、強い健かな氣持が胸に流れる氣持



百舌

ハイセウ

スコヤイナ

リヌ

鶉



がする。
 次には鶉が来る。山家の午過、だるさうな蟋蟀こはらびの聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る。静けさの底に、どこやら窶れた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて来て、何の音ともわからない。すると、樹陰の葦畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫がひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥が、ついと身をそらして逃げていつてしまふ。それが鶉だ。
 鶉といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて、たゞひとり出て来る。そして、そこらの小枝

ヤツ
クイキ
モ

四十雀



にとまるなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くかのやうに、ひよくり、ひよくりとかるい御辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひだす。私はそれを見ると、他のため、世の中のためといつたやうなわけでなく、たゞ自分一人のためにうたつて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。
 鶉が来てもの十日もたゞぬ間に、四十雀が来る。この鳥は鶉と違つて、十羽も二十羽も群をなして来る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音が、さつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀の甕たぐなどを啄きま

ミグレ



鶇鷓

はしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せ
 て、銀の鈴をふるやうな透きとほつた聲で、早口にしゃべり
 續ける。で、かういふ大層な群の中には、きつとまだ羽の伸
 びきらない、灰色の産毛そのまゝの雛がまじつてゐて、どう
 かすると、高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返るこ
 ともあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひよいと下枝
 につかまつて、ませた身振で樹肌のひゞを啄いたりする。
 まるで山家育ちのすばしこい、きさくな魂そのものを見る
 やうな氣持がする。

して来る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺さんは炬
 燵にもぐり込んでこくり〜と居眠をする。その側で婆
 さんは、せつせと糸車を繰つてゐる。檐に吊した干菜の影
 が煤けた障子に見すぼらしく映つて、時折ちつぽけな小鳥
 の影がちらついたりする。どうかして、糸目が切れて、睡さ
 うな紡錘の音がばつたり止むと、こそ〜と掛菜をむしる
 音がする。が、老人の耳にそんな音の聴取れよう筈はない。
 婆さんは、俯いたまゝ、また糸を紡ぎにかゝる。さうかうす
 る間に、小鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい、ひ
 よいと小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狭苦しい物陰を
 出たりはいつたりして移つて行く。それが鶇鷓だ

クッ
ノキッ

リッ

頬白



鶉と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしょく
と降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしょぬれになつ
て、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の
國で、この鳥の啼聲を解いて、

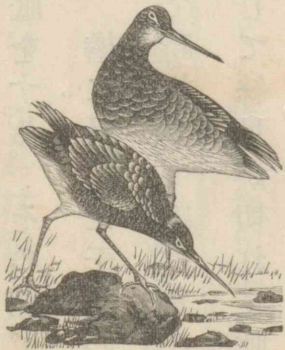
一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度は便りに金十兩

やりたいけれど、一文も御座な

く候。



鶉

と言傳へてゐるのを思ひ出して、し
みじみと世わたりのむづかしさと、旅心の寂しさを思は

鶉



ずにはゐられない。

うしろの雑木林にこんな小鳥が来る頃になると野にはも

うそろく鶉が來、鶉が來る。(畿内行脚)

七 形見の鎧

八 波則吉

慶長五年八月朔日、鳥居元忠が伏見の城で戦死した。

これより先、徳川家康は上杉景勝を伐つため、奥州へ下らう
としたとき、上方に事の起るべきことを察して、譜代の功臣
鳥居彦右衛門元忠を伏見の城に留めて萬一に備へさせた。
果して事變が勃發した。石田三成等が事を構へ、上方の軍
勢九萬三千七百人が伏見の城に殺到した。元忠は寡兵を

ウツア
ニヤ

八波則吉

國文學者
第五高等學校教
授
明治九年(三五三)
福岡縣生
慶長五年
後陽成天皇の御
代(三三〇)
伏見の城
文祿四年(三五三)
竣工
豊臣太閤の薨後
徳川家康はこの
城に徙つて假に
國事を視てゐた

もつて克く防ぎ克く戦つたが、衆寡敵せず、遂に城を枕に討死した。時に年六十二。



伏見城
太田天洋筆

鳥居家中興譜によれば、元忠の手兵三百五十餘人、一人も残らず戦死した。元忠は長刀を脇挟んで、城の石壇に腰を掛け、近づく敵を待つてゐた。ところへ、

新賀孫市
名は重次

紀州の住人、雑賀孫市。

と名乗つて、鎗をしごいて突いてかゝる。元忠は長刀を取

直し、

當城の大將、鳥居彦右衛門元忠なるぞ。首取つて功名せよ。

かう言つて、静々と壇を下つて討つてかゝる。

雑賀孫市、忽ち鎗を伏せ、地にうづくまつて申す。

公は當城の總大將。下郎如きに御手を下されるのは勿體ない、御腹召されるに於ては、恐ながら御しるしを賜はりまする。

元忠は莞爾と笑つて

然らば鎧を脱がう。

と、孫市に手傳はせて鎧を脱ぎ、腹十文字に掻切り、

では早く……
といつて、敵に首を授けた。
それから多くの年月が流れた。

元忠の次子新太郎忠政は、出羽の國最上の城主として、二十四萬石を賜はつた。元忠の誠忠を家康は一日も忘れなかつたので、香華の地も加へてあつたといふことである。

或日水戸藩士雜賀孫市重次から忠政の許に使者があつて、次の様に言入れた。孫市は當時水戸中納言に抱へられて三千石を食み、家老に準ぜられてゐたのであつた。

重次、先年、御父君の御最期に参り合ひ、その時の御物具を

忠政
大坂の役に江戸を守つて功があつた
寛永五年(三六八)卒
出羽
羽前・羽後兩國の舊稱
最上
山形縣(羽前國)最上川中流地方の汎稱
水戸中納言
徳川頼房
家康の第十一子
水戸徳川家第一世
寛文元年(三三二)薨
年五十九
贈正二位

拙宅に藏めてをります。御形見として御覽に入れたく存じますが、貴意如何でござりませうや。

忠政は非常に悦び、御厚意千萬忝く存じます。亡父の形見、これに過ぎた物はござりません。何卒、一見御願ひ申し上げます。と答へた。

使者が歸ると間もなく、孫市は、件の品々を携へて水戸から最上の城へ出かけた。

忠政は門外に出迎へ、奥へ請じて、長途の疲勞を犒つた。この日の忠政の歡待ぶりは、誠に善盡くし美盡くし、心をこめた限りであつた。

甲冑太刀・刀などが床の間に飾られた。忠政は涙をはらはらと流してこれを拜み、亡父最期の扮装が目の前に浮んで、思はず落涙仕りました。御蔭を以て、亡父に再び対面する心地が致します。御芳志は永く忘却致しません。といつて、厚く禮を述べた。

翌日、主人の忠政は、改めて客の孫市に向つて、この度の御芳志謝するに言葉もござりません。幸に亡父の最期の扮装を見ることが出来まして、返すくも有難う存じます。重ねて御禮を申し上げます。就きましては、亡父が形見の品で、拙宅に傳へてをりまするも

のは、武具その他数々ござります。で、この物具——折角御持參下さいました甲冑太刀・刀の類は、見苦しうはござりませうが、貴邸に留め置かれて、御名譽と共に永く御子孫にお傳へ下さりませぬか。弓矢取る身武士道の道にも叶ひ、且は御子孫への好い御記念とも存じますれば、この儀平に御聽届を願ひ上げます。と條理を盡くして、件の武具を孫市へ返した。孫市はいたく感じて、然らば折角の思召ゆゑ貴意に従ひますのでござりませう。といつて、これまた厚く禮を述べて、そのまゝ件の品々を持

つて水戸に歸つた。いふまでもなく元忠の武具は雜賀家の家寶となつて、永く同家に祕藏された。

忠政は、さすがに父の子ほどあつて、誠忠眞摯の武人であつた。孫市に對して、

御芳志は永く忘却致しません。

と言つた詞に違はず、その後毎年冬の頃になれば、綿を厚く入れた衣類四五領を使者に持たせて、遙々水戸へ送り遣はし、長い一生の間、決して怠ることがなかつた。頼房卿はこの由を傳へ聞かれ、

近頃奇特な事だ。

威公
頼房の私諡

室 鳩巢

名は直清
徳川幕府の儒臣
享保十九年(三三
四)卒
年七十七
贈從四位
徳川秀康
家康の第二子
中納言
越前六十七萬石
の領主
慶長十二年(三三
七)薨
年三十四
贈正二位

と仰せられて、忠政の使者が來る頃になれば、必ず道路を修理させられ、又孫市の宅へは、魚鳥の類を送つて、接待の料に供せられること、年々變らなかつたといふ。水戸威公といひ、鳥居忠政といひ、又雜賀孫市といひ、いづれもいづれも義理堅い古武士の典型、その行爲は善行の三巴として、永く後世に傳へて、世道人心に裨益を與へるものであらう。(筆高きに登る)

書
八 阿閉掃部

室 鳩巢

徳川秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。狛伊勢といふは

國にて世祿の歴々なりしが、かの掃部を招待して、嫡子に鎧の着初せしむることを頼みけり。さて饗膳すみ、祝の盃に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の着初にて候ま、御身の御武功の事御物語り候ひて彼に御聞かせ候へ。」といひしに、掃部「いや某が身の上に、御話し申すべき程の武功は覚え申さず候。されど、御望も黙しがたく候ま、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見申して候その事を話し申すべし。江州賤ヶ嶽の戦に、暮方に、某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵と覺しくて、うしろより詞を懸けし故、馬を引返し候へば、その人申し候は、今朝よりかせぎ候へども、よき敵に會ひ申さず候。御人體を見受

賤ヶ嶽の戦
 天正十一年(三三)
 三羽柴秀吉と柴田勝家との戦
 余吾の湖
 滋賀縣伊香郡余吾村にある湖水琵琶湖の東北方にある

け、幸とこそ存じ候へ。御不承ながら御相手になり申すべし。とて進みより候故、それこそ此方も望む所にて候へ。とて、たがひに馬を乗りはなし、すでに鎧を合はせんとしけるに、その人「暫し御待ち候へ、今朝より雑兵を多く突崩し候故、鎧よごれ候ま、鎧を洗ひ候ひて御相手になり候はん。」とて、余吾の湖に鎧を打ちひたし、二三遍洗ひつゝ、「さらば。」とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてて、ものあやめ



余吾の湖

も見えずなりぬ。その時あなたより又詞をかけ、「もはや鎗先も見えず候。御殘多くは候へども、これまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候。」とて、某が名をも聞き候ひて、「この後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手には懸り申すまじく候。若し又味方にて候はば、わりなく入魂致し候べし。さらば。」とて立別れしが、これほど見事なる武士は終に見侍らず。いかが成りはて候にや」と語りけり。

その頃伊勢がもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來て勝手にゐたりしが、この物語を聞きて、勝手よりにじり出でつゝ、掃部にむかひて、「さても只今の御

物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。その時御相手になり候青木新兵衛は、恥づかしながら我等にて候。かく申すばかりにては、浮きたることにおぼすべく候。とて、その時雙方の鎧のをどし、馬の毛色を一々いひけるが、一つも違はざりければ、掃部驚きつゝ、「さてくゝ久しくて逢ひ候うて本望に候。」とて、手前にありし盃を方齋にさし、「これをするしに。」とて、腰の脇指を抜いて引きけり。それより方齋が名國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出されけりとぞ。(駿臺雜話)

九。ボ。チ

長谷川二葉亭

長谷川二葉亭
本名は辰之助
號は二葉亭四迷
文學者・新聞記者
名古屋生
明治四十二年(二
癸卯)歿
年四十八

ポチは朝起だ。僕の起きる時分には、もう疾うに朝飯も済んで、ひとつきり遊んだところだ。が、僕の聲を聞きつける。と、何處にゐても一目散に飛んでくる。

僕が急いで庭へおりるところを、ポチは透かさず泥足で飛びつく。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命にふりたてて、嬉しさうに面を見上げる、見下す。目と目とびたりと合ふ。たまらなくなつて、僕が横抱きに抱く。ポチは抱かれながら身をもがいて、大暴れに暴れ、僕の手をなめ、胸をなめ、顎をなめ、頬をなめ、なめてもくく、なめ足りないで、悪くすると、口までなめる。父が顔をしかめて、「きたないく」といふ。なるほど考へて見れば、きたないやうではあるけれども、し

かし僕は嬉しい、やめられない。

これが済むと、ポチもやつと氣が済んだといふ形で、また庭先をうろくしだして、縁の下などを覗いて見る。と、そこに草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足か何ぞがある。好い物を見つけたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して来て、首を一つふると、草履は横飛びにほんと飛ぶ。透かさず追つかけて行つて、又くはへて、ほんととはふる。そんなたわいもないことをして、活潑に元氣よく遊ぶ。その隙に僕は顔を洗ふ、飯を食ふ。それが済むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、この時が一日中で一番僕の苦痛な時だ。ポチが跡を追ふ。うっかり出ようものならど

こまでも、どこまでもついて来て、逐つたつて、どうしたつて
 歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちや
 んと知つてゐて、その時分になると、何時の間にか玄關先へ
 廻つて待つてゐる。仕方がないから、しまひには取つつか
 まへて、否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやう
にしてゐたが、さうすると、前足で格子を引搔いて、悲しい悲
しい、血を吐きさうな啼聲を立てて跡を慕ふ。姿が見えな
くなつても啼止まない。 僕もそれは同じ思だ。泣出しさ
 うな顔をして、ばたくと駈出し、聲の聞えない處まで来て、
 漸くほつとして並の歩調になる、そしていつも心の中で、く
 りかへし、くりかへし、こんなことを思ふ。

「僕がゐないと寂しいもんだから、それであんなに跡を追
 ふんだかはいさうだなあ。僕あ學校なんぞへ行きたく
 はないんだけれど、……行かないと、おとうさんがボチを



長谷川 葉亭

棄てて了ふつて言ふもんだ
 から、それでしやうがないか
 ら行くんだけれども……」

じやんくくと放課の鐘が鳴
 る。今まで静かだつた校舎内が俄に騒がしくなつて、彼方
 此方の教室の戸が前後して、あわたゞしくばつくと開く。
 と、その狭い口から、眞黒な塊がどつと廊下へ吐きだされ、崩

れてばら／＼の子供になり、我勝ちに玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら、口々に何だかわめく。たゞもう校舎をゆすつて、わあといふ聲の中に、無数の圓い顔が黙つて大きな口をあいて躍つてゐるやうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごたごたと入りみだれ重なり合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒へ脰がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜焼の足を踏んだりして、上を下へとこねかへしたあげくに、わつと門外へ押出して、東西へちり／＼になる。

仲好し二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をぼんとはふり上げては、ちよいと受けて行くいたづらものがある。

その隣は往來の石ころを蹴飛ばし／＼行く。誰だかあとで遊びに行くよ」とわめく。「蝗を取りに行かないか」といふ聲もする。友だちが皆道草を喰つてゐる中を、僕一人は駈抜けるやうにして、脇見もせずにつせと歸つて来る。

家の横町の角まで来て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつとその方角を見る。果してポチが門前へ迎へに出てゐる。僕を見つけるや否や、一散に飛んで来て飛附く、なめる。何だか「兄さん」と言はれたやうな氣がする。若し本包と辨當箱と草履袋とで両手が塞がつてゐなかつたら、僕はこの時ポチをつかまへて、どうしたか分らないが、それがあるばかりに、どうすることも出来ない。據なく頭を撫でて

やるだけで不承々々また歩き出す。と、ポチも忽ち身をくねらせて、横飛にひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の顔を見て、おどけた眼色をする。追附くと、又逃げて、又その眼色をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。玄關から大きな聲で「只今」といひながら内へ駈込んで、いきなり本包をそこにはふり出し、あわてて辨當箱をあけて、今日のお菜の残りと稱して、實はたべたかつたのを我慢して半分残して來たのをポチにやる。それでも足りないで、おやつにお煎餅を三枚貫つたのを、せびつて五枚にして貫つて、二枚は食べて、三枚は又ポチにやる。それから庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつと「おさらひをおし」といふ。お

さらひはいやだけれども、これをしないと、すぐポチを棄てるといはれるのがつらいので、澁々内へ入つて、形の如く本を取出し、少しばかり「おんによこによことやる。それでおしまひだ。『餘り早いね』と母が言ふのを、空耳つぶして、つと外へ出て「ポチ來い、ポチ來い」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。これが僕の日課で、ポチでなければ夜も日も明けないのであつた。(二葉亭全集—平凡)



ポチ

サフラン

オランダ語
洩夫藍の漢
字を宛てる

森鷗外

名は林太郎

醫學者・文學者

醫學博士・文學

博士

陸軍軍醫總監

東京帝室博物館

長

石見國(島根縣)

生

大正十一年薨

年六十二

巖谷小波

名は季雄

童話家・俳人

東京生

昭和八年歿

年六十四

意味

一〇 サフラン

森鷗外

名を聞いて人を知らぬといふことが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある。

私は子供の時から本が好きだといはれた。少年の讀む雜誌もなければ巖谷小波君のお伽話もない時代に生れたので、お祖母様がお嫁入の時に持つて來られたといふ百人一首やらお祖父様が義太夫を語られた時の記念に残つてゐる淨瑠璃本やら、謡曲の筋書をした繪本やら、そんなものを有るに任せて見てゐて、凧といふものを揚げない、獨樂といふものを廻さない。隣家の子供との間に何等の心的接觸

父
森静庵

も成立たない。そこでいよく本に讀耽つて器に塵の附くやうに、いろいろの物の名が記憶に残る。そんな風で、名を知つて物を知らぬかたはになつた。大抵の物の名がさうである。植物の名もさうである。

父は所謂蘭醫である。オランダ語を教へてやらうといはれるので、早くから少しづつ習つた。文典といふものを讀む。それに前後篇があつて、前篇は語を説明し、後篇は文を説明してある。それを讀んでゐた時、辭書を貸して貰つた。蘭和對譯の二冊物で、大きい厚い和本である。それをひつくり返して見てゐるうちに、サフランといふ語に逢著した。まだ、植學啓源などいふ本の行はれた時代の辭書だから、音

譯に漢字が當嵌めてある。今でもその字を記憶してゐるから、こゝに書いてもよいが、サフランと三字に書いてある初の一字は、所詮活字には有合はせまい。依つて偏と旁とを分けて説明する。「水」の偏に「自」の字である。次が「夫」の字、又次が「藍」の字である。

「お父さん、サフラン、草の名」としてありますが、どんな草ですか。

「花を取つて、干して、物に色を附ける草だよ。見せてやらう。」

父は藥箆筒の抽斗から、ちぎれたやうな、黒ずんだ物を出して見せた。父も生の花は見たことがなかつたかも知れな

い。私にはたま／＼名ばかりでなくて物が見られても、干物しか見られなかつた。これが私のサフランを見た初である。

上野
東京市下谷區上野
團子坂
東京市本郷區の内
作者の住所近くの坂
東照宮
上野公園にある
社
社格は府社
祭神は徳川家康



サフラン

二三年前であつた。汽車で上野に着いて、人力車をやとつて團子坂へ歸る途中、東照宮の石壇の下から、薄暗い花園町にかかる時、道端に筵を敷いて、球根

からすぐに紫の花の咲いた草を列べて賣つてゐるのを見た。子供から半老人になるまでの間に、サフランに對する知識は餘り進んでゐなかつたが、圖譜で生の花の形だけは

知つてゐたので「おやサフランだな」と思つた。花卉として東京でいつごろから弄ばれてゐるか知らない。とにかくサフランを賣る人があるといふことだけ、この時始めて知つた。

この旅はどこへ往つた旅であつたか知らぬが、旅宿を立つたのは霜の朝であつた。もう温室の外にはあらゆる花といふ花がなくなつてゐる頃の事である。山茶花も茶の花もない頃の事である。

サフランにも種類が多いといふことは、これもいつやら何かで讀んだが、私の見たサフランはひどく遅く咲く花である。しかし極端は相接觸する。ひどく早く咲く花だとも



山茶花

ヒヤシンス

Hyacinth



白山下
東京市小石川區

いはれる。水仙よりも、ヒヤシンスよりも早く咲く花だともいはれる。去年の十二月であつた、白山下の花屋の店に、二錢の正札附でサフランの花が二三十、千からびた球根から咲出たのが列べてあつた。私は散歩の足を止めて、球根を二つ買つて持つて歸つた。サフランを我がものとしたのはこの時である。私は店の爺さんに問うて見た。「爺さん。これは土に活けて置いたら、又花が咲くだらうか。」

「え、よく殖える奴で、來年は十位になりませうか。」
「さうかい。」

私は買つて歸つて、土鉢に少しばかり庭の土を入れて、それ

を埋めて書齋に置いた。

花は二三日で萎れた。鉢の上には袂屑のやうな室内の塵が一面に被さつた。私は久しく目にも留めずにあつた。

すると今年の一月になつてから、緑の絲のやうな葉が叢がつて出た。水もやらずに置いたのに、活氣に満ちた、青々とした葉が叢がつて出た。物の生ずる力は驚くべきものである。あらゆる抵抗に打勝つて生じ、伸びる。定めて花屋の爺さんのいつたやうに、段々球根も殖えることだらう。

硝子戸の外には霜雪を凌いで福壽草の黄いろい花が咲いた。ヒヤシンスや貝母も花壇の土を裂いて葉を出しはじめた。書齋の内にはサフランの鉢が相變らず青々として

福壽草



貝母



ある。鉢の土は袂屑のやうな塵に掩はれてゐるが、その青青とした色を見れば、無情な主人も折々水位やらずにはゐられない。

これはサフランといふ草と私との歴史である。これを讀んだら、いかに私のサフランに就いて知つてゐることが貧弱だか分るだらう。しかし、どれ程疎遠なものにもたまたま行きずりの袖が觸れるやうに、サフランと私との間にも、接觸點がないことはない。物語の筋合はたゞそれだけである。

宇宙の間に、これまでサフランはサフランの生存をしてゐた。私は私の生存をしてゐた。これからも、サフランはサ

南條文雄

佛教學者
文學博士
帝國學士院會員
大谷大學總長
越前國(福井縣)
生

昭和二年寂
年七十九

山國谷

大分縣下毛郡に
ある溪谷

大舎

畫僧

嘉永三年(三〇)

寂
年七十八

賴山陽

名は襄

通稱は久太郎

儒者

安藝(廣島縣)の
人

天保三年(四九二)

薨

年五十三

贈從三位

フランの生存をして行くであらう。私は私の生存をして
行くであらう。(鷗外遺珠と思ひ出)

書 二 山陽と法海

南條文雄

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大舎
は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人墨客と交
はり、別して賴山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十
九の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲
華上人の手引であつた。山陽が耶馬の溪山は天下に無し。
と激賞してから、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに
至つたのである。

八代

熊本縣八代郡八

代町

法海

號は橘州

肥後の人

天保五年(四九四)

寂

年六十七

當時、肥後國八代の光徳寺に易行院法海といふ、學徳共に高
い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次、豫て雲華上人よ
り得た紹介を以て遙

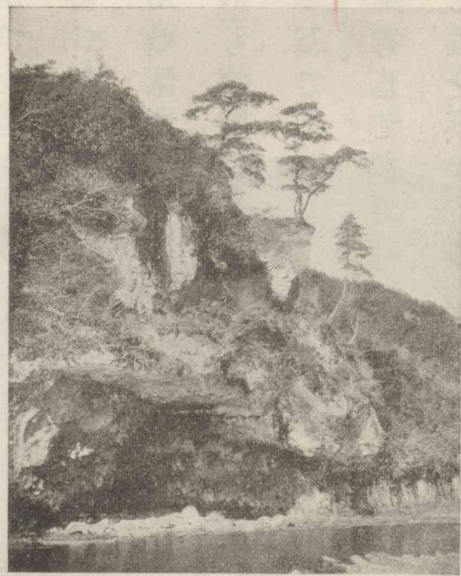
遙と法海師を尋ね行
き、賴久太郎老師の高

名を慕うてお尋ね申
した。お取次をお願

ひ申すと申し入れた。
折柄机の前に端坐し

て讀經してゐた老師は、やをら起つて、山陽に面會した。山

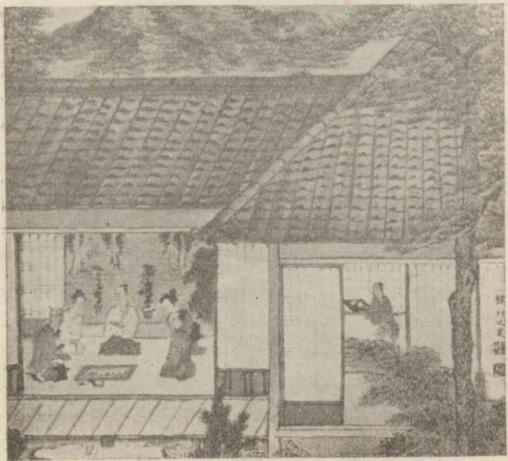
陽は初見の挨拶をすませてから、自分の書いた「楠公傳」の稿



耶馬溪
賴山陽投筆巖

本をその懐から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を」といつた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして靜かに口を切つた。

この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふもの、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようとはせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。この時法海師の鋭い眼光は山陽の面上



筆村橋野矢

省歸の陽山頼

忠臣は、
忠臣ヲ求ムルニ
ハ、必ず孝子ノ
門ニ於テス。
(漢書、韋彪傳)

を電のやうに射た。山陽は我知らず面を伏せた。

法海師は更に語を繼いで、忠臣は必ず孝子の門に出づ。とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を書くとは、大それたことではないか。楠公の靈若し知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。老師はかく言ひをはつて、すつと起つて元の座に復し、靜かに讀經すること初のごとくであつた。

程經て、やつと頭を擧げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣がついた。が、今は取着く島もない。老師の前に默禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭偉い和尚だ。」これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の腹の底から搾り出された感歎の辭であつた。

あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我が意を得たといふやうに、「さうであつたか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。

知行合一、今こそそれを實行すべき時である。」といつた。

山陽は覺えず立上つて、法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ。といふや否や、早々行李をととのへ、翌日早朝に發足して老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。

陽明學

明の大儒王陽明の唱へた知行合一の學說

夏日の日
冬日の日

趙衰ハ冬日ノ日ナリ、趙盾ハ夏日ノ日ナリ。

(左傳)

その註に「冬日ハ愛ス可ク、夏日ハ畏ル可シ。」とある

慶長元年

後陽成天皇の御代(三五)

明韓の使者

明使は楊方亭・沈惟敬
韓使は黃愼・朴弘長

界浦

今の大阪府堺市

伏見

今の京都市伏見區

柳川調信

對馬島主宗義智の臣

三道

慶尙・全羅・忠清

小西行長

豊臣秀吉の臣
征韓役の先鋒

慶長五年(三六)

石田三成に黨し京都の三條河原で斬られた

山陽は爾來年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎へ、吉野や伊勢にお伴して孝養を盡くした。山陽が、その後、至孝の子として數々の美談を遺したのも、畢竟兩師の忠言を虚心に受入れた爲である。(修養錄)

三 秀吉封冊を退く(原漢文) 頼 山 陽

慶長元年八月、明韓の使者、共に界浦に至り、二十九日、伏見に至る。秀吉柳川調信をして韓の使者を責めしめて曰く、「吾兵を收むれども、汝が國未だ三道を獻ぜず。今又王子をして來りて再造の恩を謝せしめず。乃ち微者を遣はして我を辱しむ。我、汝の入見するを許さず」と。二使小西行長に

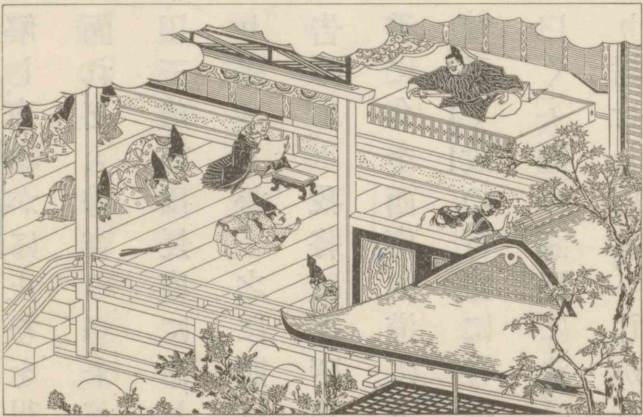
九月二日
後陽成天皇の慶
長元年(三五)

因りて謝すれども、聽かず。九月二日毛利氏をして兵仗を列ね、明の使者を延きて城に入らしむ。諸將帥皆坐す。暫くにして、秀吉幄を開きて出づ。侍衛叱と呼ぶ。二使慙伏し、敢へて仰ぎ視るなし。金印、冕服を捧げ、膝行して進む。行長之を助けて禮を畢へしむ。

承兌
京都相國寺の僧

三日、使者を饗し、既に罷む。秀吉冕を戴き、裴衣を被り、徳川家康以下七人をして、各其の章服を被らしめ、僧承兌を召して、冊書を読ましむ。行長私に之に囑して曰く、「冊文沈惟敬の説く所と、或は齟齬するものあらん。子且く之を諱め」と。承兌敢へて聽かず。乃ち入りて、冊を秀吉の傍に讀む。爾

を封じて日本國王と爲す」と曰ふに至りて、秀吉色を變じ、立



秀吉封冊退く 繪本大関記

ちどころに冕服を脱して之を地に抛ち、冊書を取りて之を裂き、罵りて曰く、「吾日本を掌握す。王たらんと欲せば則ち王たり。何ぞ髯虜の封を待たんや。且吾にして王と爲らば天朝を如何せん」と。乃ち行長を召し、誚讓して曰く、「汝敢へて我を欺罔し、以て我が邦の辱を爲せり。吾將に汝と明の使者とを併せて、皆之を誅殺せんとす」と。行長股栗し、罪を三

三奉行
石田三成
増田長盛
大谷吉隆

加藤清正
 豊臣秀吉の臣
 征韓役の先鋒
 肥後の領主
 慶長十六年(三七)
 薨
 年五十
 贈従三位
 大谷吉隆
 豊臣秀吉の臣
 五奉行の一
 慶長五年(三六〇)
 石田三成に黨し
 事敗れて自刃し
 た
 年四十一
 石田三成
 豊臣秀吉の臣
 五奉行の一
 慶長五年徳川家
 康と關ヶ原に戦
 つて敗れ京都の
 三條河原で斬ら
 れた
 増田長盛
 豊臣秀吉の臣
 五奉行の一
 元和元年(三七五)

奉行に誘し、書牘數通を出して證と爲す。承兌も亦之を救
 解し、事纔かに止むを得たり。而れども秀吉の怒未だ釋けず。即夜加藤清正・大谷吉隆・石
 田三成・増田長盛に命じ、明・韓の使者を逐ひ、資糧を賜ひて遣
 り歸さしむ。之に謂はしめて曰く、若速に去りて汝の君に
 告げよ。我將に再び兵を遣はして汝の國を屠らんとすと。
 遂に令を西南四道に下し、兵十四萬人を發し、明年二月を以
 て、悉く故の行臺に會せしむ。柳川調信私に黃愼に囑して
 曰く、太閤の意已に決せり。速に三道を獻じ、王子をして來
 り謝せしめよ。しからずんば則ち貴國復禍を被らんとと。
 惟敬猶其の虚喝なるを疑ふ。已にして沿道兵を治むる狀

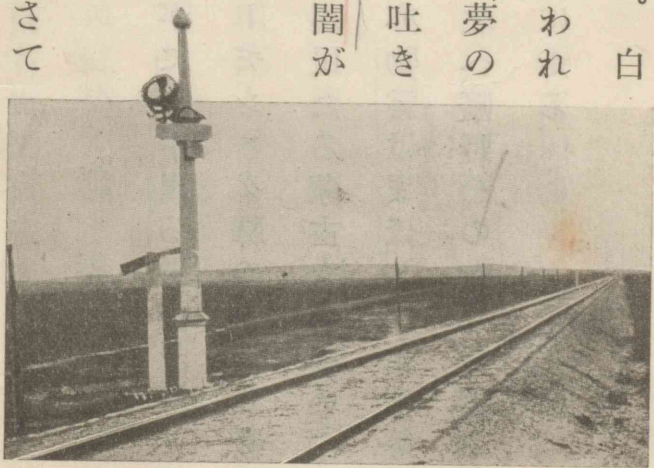
を見、則ち大いに驚きて奔り去りぬ。(日本外史)

一三 シベリヤの旅 新妻 莞

その子盛次が大
 阪方に興したの
 に坐して切腹を
 命ぜられた
 年七十一
 新妻 莞
 元新聞記者
 明治二十五年(三
 五)生
 シベリヤ
 Siberia
 ウェルフネウー
 デンクス
 Verkhne
 Udinsk

車内にごろりとしてゐても汗がにじみ出る暑いシベリヤ
 を走る。こと二日、ウェルフネウーデンスク驛のあたり、新し
 い勞農社會主義共和國聯合の國民たる蒙古人の多いのに
 興を惹かれ、そして、彼等の目も亦物言はまほしげに我等の
 上に集るを感じつゝ、北へ、更に北へ、曠野をのたうち廻る怪
 獸の如く、われらの汽車は走りに走る。
 その夜である。
 夜といつても、故國の夏の夕方の六時頃よりももつと明る

い、それで時計の針は十時を過ぎてゐる。汽車はシベリヤ名代の白樺の林に分けいつた。白樺といへば、こゝまで来る道もわれらの汽車は白樺を燃料として、夢の如く淡く消える乳白色の煙を吐きつゝ進んで来たのだ。漸く夕闇が迫つて来た。窓の左右は、文字通りには知らぬ白樺の林である。林の奥は晝尙暗しの感があるが、そこに茂る白樺の幹、さては枝のそれ、は、暮れなやむ夕べの微光を吸つて、白金の



道 鐵 ヤ リ ベ シ

如く、象牙の如く、怪しげなる光を放つ。白夜？ さうだ、白夜の國に入りつゝあるのだ。停るべき驛とともないので、汽車は轟々又轟々、千古の深林の静寂を破つて突進する。吐きだされた煙がちぎれて、林に迷ひ入り、まだ芽ぐみもせぬ白樺の枝々に絡みつき、梢を傳ひ、銀と緑と黒とを融いて展べた鏡ともいひたい空に、また大自然の祕密をそのまゝ包むが如き林の奥の闇に、飄々として吸はれてゆく。走りつゞくること二時間餘、さすがにわれらの怪獣も疲れ、たか、林を切開き、白樺の薪を處狭きまで積んだ小驛に喘ぎ喘ぎ脚を停めた。給水するのであらう、それらしい響が前方機關車のあたりから聞えてくる。

車外に出てみると、昨日とは打つて變つて、刺すやうな冷たい風が頬を撫でる。時計は十二時を過ぐる數分、日はもうとつぷりと暮れて、車内の人々の眠を守るやうに、蒼く磨かれた星は空一杯、燦としてきらめいてゐる。われらは頭をあげて北とおぼしき空を眺めた。故國で見なれた北斗七星、彼の何か意味ありげに並んでゐる七つの星を見て、懐かしいものに接する氣分を味はひたかつたのだ。ところが、ない。どう見てもない。いかにシベリヤは謎の國の一角だとはいへ、星まで消える筈はなからうと見直すと、何のこと、われらの頭上、正しく垂線を描いたあたりにあるではないか。北斗を頭上に仰ぐところ、我等は、もうそんなところ

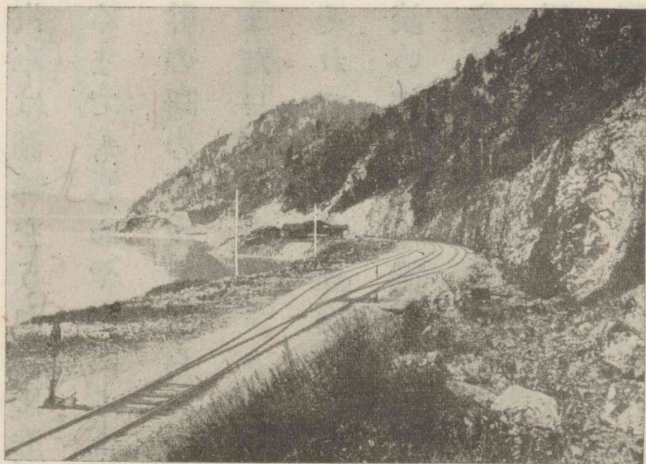
ケット
Blanket
Sweater
汗襦袢
毛布
トの略
スエーター

まで来てしまつたのかと、星に對してぼんやりものを思つてゐたら、發車の合圖の鐘が鳴つた。あわてて車上に駈けあがつた刹那、餘韻長く汽笛は鳴つた。しばらくして寢ようと、ケットをかぶつたはよいが、しみじみと寒い。そこでまた起きだして、慈母が手づから編んでくれたスエーターを着込み、外套やら何やら懸けて枕に就く。眠らうとしても一度外を見ると、車窓を流れ出るほどの暗い燈光の末、林間ところどころ、に白皚々たる残雪が目に入つた。
大べらぼうなシベリヤ！ 昨日の酷暑と比べてどうしたといふのだ。

カーテン
窓掛
Curtain

思はずも、かうつぶやいたのである。
 どれほど眠つたであらう、幾度か寒氣に夢を破られつゝ、
 とうとしたと思ふ間もなく、また眼が覺めた。と、汽車は、轍
 のきしり靜かに、危険な箇所でも過ぎるのか、這ふやうにし
 て進んでゐる。「どうしたのだらう」。さう思つて、頭をもた
 げ、ひよいと窓外をのぞかうとしてカーテンをよせると、こ
 れはどうだ。麓を曉の闇に沈めた雪の連山が、巍々また蜿
 蜒、星の消えのこる深い藍色の大空を背景に、ほつかりとう
 き出してゐるではないか。
 「あつ」といつたまゝ、二の句のつげぬわれらは、むつくり飛起
 きて窓に倚つた。よく見れば、大地と思つた眼下は森々た

バイカル湖
シベリヤ中
部の淡水湖
L. Baikal



バイカル湖

る湖水、水の面の平板をやぶるものは、氷の島にちがひない。
 バイカル湖だ。そして、バイカ
 ルの連山だ。おゝこゝを眠り
 過して、どうしてシベリヤを通
 つたといはれようぞ。
 まだ日は地平線を出ない。
 東から西へ、大空はくつきりと
 光の濃淡を織出し、雪の連山の
 中腹以上のみが、その肌を見せ
 てゐる。頂上は、いたゞく雪を
 淡い紅に染め、漸次麓に下るに随ひ、紅は紫に、紫は暗綠色に、

そして朦朧たる曉闇に、腰から下を浸してゐる。汽車は湖畔をうねり、幾度かトンネルを出ては渚を傳ひ、飽くまでもしめやかに——さうだ、心あつてこの莊嚴なる湖畔の曙の静寂を破らぬやう——行き行くのである。まだ日は出ない。それでも雪の連山は、分また分ごとに衣を更へる。頂上の淡い紅は漸く濃くなり、紫だつた中腹は、かはつて淡い紅になつた。さうして麓一體が次第にあざやかな紫に變じて行く。同時にまた、空の色、水のおもて、氷の島々、それが皆忙しく衣をかへる。萬象をして思のまゝのけはひを現さしむべく、

日もゆつたりと出るらしい。やがて日が出る。巨人が光をつかんで八紘に投げつけたその瞬間！それは、世界創造の黎明、萬象がはじめて形を得た歡喜に酔ふ刹那と何處がちがはう。今はそれだ。雪の連山は面はゆげにその肌の全部を見せ、麓の方、われらの對岸に當る湖畔一體、清淨純白の雪と氷とは、まさしく喜に燃えてゐる。日が地平線を離れる。森々たる湖上、どれだけ廣いか見當もつかぬ湖上、それは、その涯を素絹の織目のやうに地平線に没してゐる雪の連山の屏風にまもられ、小波一つさゝやくを見ない。のみなら

ツァール
露國皇帝
Czar

ず、湖面の半ば以上は、五月も末に近いといふのに、まだ氷原である。明治三十七八年戦役の當時、われらが今走つてゐる湖岸の鐵道工事がはかどらぬ苦しさ、ツァール政府は、この湖の氷の上に鐵路を敷き、運輸を急がせた話がある。その時、さすが堪忍づよい湖水の神も、靜寂と莊嚴とを破られる腹立たしさから、氷の一角を破つて列車を沈めたと傳説に近い實話が残つてゐる。生きながら氷の底に沈んだ兵士の靈は、今なほこのあたりに迷つてゐるであらう。日が漸く高くなる。われらの汽車は湖畔を走ること四時間餘にして、煙の出ぬ汽船が數隻、赤さびた船腹をのぞかせて埠頭に繋がるバイ

カル驛についた。こゝで、給水である。乗客は皆起きだした。勞農政府の禁制とあつて、寫眞器はかつぎ出せぬが、雙眼鏡などを携へて渚に急ぐ。渚に来て見ると、水の清さはまた別段である。浮いてゐる氷の島々は、いづれも水面下に、水上の幾倍かの氷をかくしてゐるが、さて、濁るを知らぬ水はこれを乳白色にのぞかせて、折角隠した氷の苦心を空しくさせてゐる。その水の冷たさよ。

澄みきつた大氣、おゝ呼ばば答へ、手を伸べなば湖面をわたつて來さうな連山、汝の神々しさはいづれの日までつゞくか。山に對してさながら大聖に對するが如く、黙々として

見入つてみると、脚下近く、氷の島の一角が碎け散つた。と見たのは氷の島ではなかつた、氷の上に翼を休めてゐた雪よりも白い鶴鴿に似た小鳥であつた。唯一の生物—小鳥はいづこともなく飛んで行く。(東京日日新聞)

一四 浦鹽より

太田覺眠

拜啓野衲は川上事務官と共に最後の引揚船にて歸朝致すべき旨申上置候處西比利亞内地奥深く入込み居る同胞は諸河結氷のため水路の交通全く断絶致居候今日如何なる手段を取るも引揚船出帆の期日迄に

浦鹽
シベリヤ東部の港
Vladivostok
太田覺眠
西本願寺派の僧
慶應二年(三三六)
伊勢國(三重縣)
四日市生
川上事務官
時の貿易事務官
川上俊彦
莫斯科總領事
南滿洲鐵道株式會社理事
江戸生
昭和十年卒
年七十五

當港へ到着の見込到底これなく幾百の同胞は餘儀なく殘留する事に相成申候今後全く本國の保護を離れて心細く敵國內に殘留する同胞の心情を察する時は野衲は如何にしてもこの憐むべき同胞を棄てて歸朝するに忍びず断然敵國內に踏留る事に決心致候野衲がこの事を事務官に申出でたる時事務官は野衲の行為を以て政府の命令に背くものなりとし色を作して止められたり且曰く

君は露國政府の保護に安んぜんとするかと
野衲曰く予は露國の保護に安んずるものに
ありずその危険に甘んぜんとするものなり今や
貴官は居留民が唯一の頼みとする帝國の國旗を
收めて此の地を引拂はんとす今後殘留の同
胞はそれ誰をか頼まん予は身僧侶として此
の人々の境遇を見つ、船に上ること能はず固よ
り死は疾くに覺悟せりと事務官は突然起
つて野衲の手を執つて曰く予は最早君の志

を沮止せざるべし予は國民に代つて君の高義
を感謝す予は我が政府に對し君一人を見殺
にする責は甘んじて之を受けん君乞ふ佛陀の
大悲を發揮せよと相對して思はず感涙に咽ぶ
やあつて曰く前程遼遠なり相當の準備ありや
と野衲曰く一片の丹心一軀の尊像是我が爲に
千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財
ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路
銀を惠まれ且種々の注意を與へられ候旅順開

ハムロフスク
シベリヤ東
部の都市
Khabarovsk

戦の事は已に聞得たり當港には戒嚴令を布
かれ候ゆる最早日本人の居住を許されず唯今
事務官一行の乗込める引揚船を見送りたらん
後には當港に日本人としては野衲唯一人にて候
目下露人の暴行よりは寧ろ支那勞働者が
家財を奪はんとて襲い来る勢甚だ猖獗を極
め居候野衲一人の力到底之を防ぐに由なし今
夜は須彌壇の下に隠れて一夜を明かし彼等の掠
奪を恣にせしめ明朝一番汽車にてハムロフスク

に到り順次黒龍江沿岸地方に残留せる同胞
を歴訪慰問致すべく候野衲固より生還を期せ
ず候ども唯此の上は一日にても永く命を保ちて一
人にても多くの人々を慰問したき心願にて候
野衲の此の行必ず大悲の御冥見あらせ給ふ
ことを確信致候遙かに東方を望みて
陛下の萬歳を祝し奉り候匆々

明治三十七年二月十二日浦鹽斯德港棧橋にて

太田覺眠

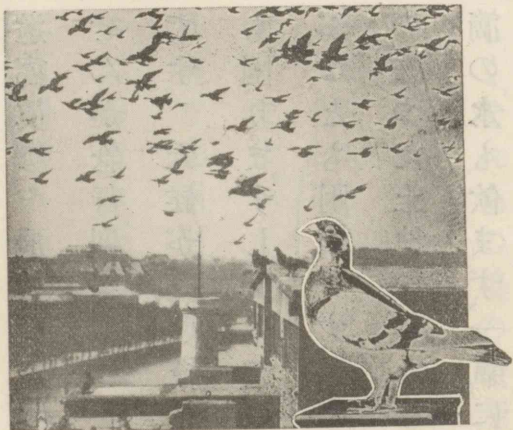
小野賢一郎
元新聞記者
日本放送協會
文藝部長
明治二十一年三
月八日福岡縣生
ニユース
News 耳新しい報
道

書取 一五 傳書鳩

小野賢一郎

新聞社は廣く、遠く、深く、正しく、そして早くニユースを得るのに懸命です。随つて電信、電話、汽車、自動車、電車、郵便など、ニユースを運搬する機關にも、細かい注意と多くの費用とを拂つてゐます。寫眞ニユースは或場合、記事のニユース以上の大きなニユース價值をもち、讀者の目や胸を打ちます。そこで寫眞を運搬するのにも、色々な機關を用ひて居りますが、遠距離の場合には、早くて正確なのは汽車便によることです。次は飛行機です。これは汽車以上に早い代りに、着陸場と多くの費用とを要します。又、天候が悪けれ

ば中止しなければならぬ場合があります。そこで電送寫眞です。これは有線と無線と二つありますが、多く有線で、



電話線を繼ぎかへさへすれば、日本内地は確實に寫眞がそのまま傳送られます。大阪から東京へ、又書は東京から大阪へ、十五分以内で寫眞が受送されるといふことは、全く科學の力で、早いも早い、こんな早い輸送方法はありません。

が、實は、機械のある場所と場所との間に限られるので、機械のない處では、送ることも受けることも出来ません。

こゝに、我が傳書鳩獨得の長所が發揮される譯です。傳書鳩なら何處からでも送ることが出来ます。速力に於て、電送寫眞機や飛行機には及びませんが、急行列車よりは早いのです。天候が險悪な時には鳩も困りますし、又未知の空を飛ぶことも困難ですが、大體勝手の分つた土地からなら、途中一滴の水も飲まず、一氣に寫眞を背負つて飛びます。そしてどうでせう、一箇月の食糧が三十錢、一日に一錢あれば飲食に満足してくれるのです。これ程忠實な、そして勞銀の安



鳩舎

エジプト 埃及
Italy 伊太利
Belgium 白耳義
France 佛蘭西
Deutschland (Germany) 獨逸
日露戦争 明治三十七・八年(三英四・五)に於ける日本と露西亞との戦
澎湖島 臺灣島の西臺灣海峡の中央に位置する大小二十餘の島嶼

い空中の勞働者、空中の通信者は外にはありません。外國では、有史以前から空中通信に傳書鳩が利用されたらしく、それらの鳩の原産地はエジプト・イタリーなどの様です。が、今日の傳書鳩の基礎を築いたのはベルギー人です。それがフランスで改良されて、今日の色々な種類が出来たわけです。日本では、徳川時代に商人が土鳩どきを使ったことがあると聞いてゐますが、明治三十二年頃、中華民國原産種の傳書鳩を二百羽輸入し、同三十四年ベルギーから三百羽輸入したことがあります。明治三十五年、ドイツから五十羽輸入したのを、日露戦争當時臺灣の澎湖島で使ひましたが巧くゆ

マルコニー
Guglielmo Marconi
(1874—)
伊太利の電氣學者

歐洲大戦争
西紀一九一四年から十八年に互つて行はれた世界的の大戦役

ベルダン
Verdun
佛國ローレン州の要塞地

かなかつた。間もなく明治四十二年にマルコニーの無線電信が發明されたものですから、この「非科學的通信法」は全滅してしまひました。
ところが、何といふ皮肉でせう、あらゆる科學の力を活用して戦つた歐洲大戦争で、科學的通信機關が使用不可能に陥つた時、神の使の如く活動したのは實にこの鳩でした。鳩は毒瓦斯の中を潜りぬけて活動しました。目をたぐらしても活動しました。ベルダンの要塞にゐた一羽の鳩は、援軍を求める通信を齎して砲煙彈雨の間を飛び立派にその大任を果して、この「非科學的通信法」の侮るべからざること

を證明しました。その結果、日本陸軍でも大正八年にフランスから鳩を輸入し、將校一名、下士二名を招聘して、訓練を開始したのであります。

今日では、新聞のニュース、またはニュース寫眞を運搬する上に於ても、鳩は重大な役目を持たされ、毎日活動してゐます。明治神宮外苑を始め、東京近郊の野球場やテニスコートなどから、頻々と鳩の放たれるのを見られるでせう。あれが傳書鳩で、二三分から五分の間に、新聞社の屋上の鳩舎に歸ります。鳩係が脚に附けてあるアルミニウム



戦場の傳書鳩小屋

明治神宮外苑
東京市四谷區と赤坂區とに跨るテニスコート
Tennis-court
庭球場
Aluminium
アルミニウム
青白色の軽い金屬

の鳩舎に歸ります。鳩係が脚に附けてあるアルミニウム

ベル
Bell
鈴又は呼鈴

日本アルプス
岐阜・富山・長野
新潟・山梨・静岡
愛知の各縣の縣
界に連なる山彙
八丈島
伊豆七島の一
その最南にある
明治十一年以後
東京府に屬した
槍岳
日本アルプスの
一峯
岐阜縣吉城郡か
ら長野縣安曇郡
に跨る
高さ三一八〇米

ムの通信筒から原稿を取出して、ベルを押しします。すると編輯室でベルが鳴り、屋上から針金傳ひに原稿が届きます。原稿は薄い紙に書いてありますが、新聞一段の行數を鳩三四羽で運ぶのはわけもないことでもし〜、もし〜、早慶戦第一回の裏。もし〜。などと電話でやつてゐる間に、鳩ならもう原稿を持つて來ます。電話ですと、一度速記に取り、それを日本字に翻譯するのですが、鳩のはすぐ工場へ出せる日本字の原稿ですから、早くて便利です。日本アルプスの巔からでも、鳥も通はぬと言はれた八丈島からでも、寫眞や原稿を運搬します。飛行機も電信電話もない槍岳から三時間半、八丈島から四時間半で東京に歸つて來るので

す。何と、非科學的通信法の役立つことでせう。傳書鳩は一日一錢の食糧だと申しましたが、どんな物を食べてゐるかと言ふと、玉蜀黍、白豌豆、これが常食で、玄米・菜種が少量皆乾燥したもの、それに水を飲むばかりですから、一箇月三十錢の食費でいゝわけです。いや、この外に妙な物を食べます。鹽土ソルトと言つて、煉瓦の粉末や赤土や鹽などを石膏で固めたお團子です。これをこつ〜啄ツクいてゐます。これは嘴を強くし且消化を助ける爲ださうです。運動としては、一日三回鳩舎から出て、天空を群がり舞ふだけですが、どうかすると糞を落すかも知れませんが、頭や服を汚さない限り、大目に見てやつて下さい。

千葉胤明
歌人
御歌所寄人
元治元年(三三三)
佐賀縣生

書取
意六

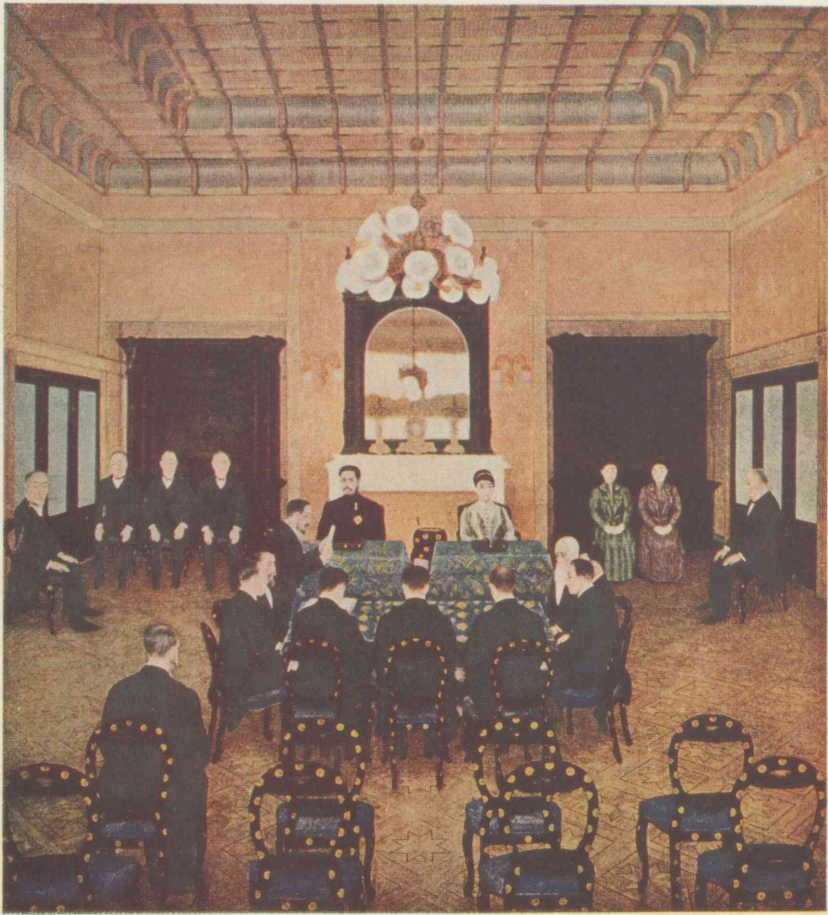
新年山

千葉胤明

明治天皇の御製を拜誦して、つねと私どもが感激に堪へなかつたのは、敬神愛國愛民の大御心のあふれて居ることでありませぬ。國家有事の際にお詠み遊ばされた御一例を申すと、

子らはみな軍のにはにいではてておきなやひとり山田もるらむ

明治三十七八年戦役中の御製でありますがこの一首を拜しましても、天皇の民草をあはれませ給ふ大御心がうかゞはれて、たゞく感泣する外はないのであります。



筆郎太新下山

始會御歌

忘れもいたしませぬが、時は明治三十八年一月元日、旅順開城の公報に接した國民は、津々浦々に至るまで、戦勝を祝し、萬歳を叫んで、歡喜にひたつたのであります。その年の正月が、いつの年にもまして一段と祝賀氣分の全國にみなぎつてをつたことは申すまでもありません。

かうした中に、御恆例による新年歌御會始の御式が一月十九日に行はれました。御式場は鳳凰間であります。御題は「新年山」と申すのであります。

私ども寄人の席は、玉座近くに設けられてありましたので、午前十時から二時間の長い間、畏多くも御側近く奉仕したわけでありました。

参列の光榮に浴した人々が、それ〴〵定め席についておますと、兩陛下におかせられては、御機嫌うるはしく出御遊ばされました。

いよく、預選歌の披講が始ります。満場は寂として聲なく、さながら水を打つたやうであります。何れも入選者が何人で、その歌はどういふのであらうかと、耳を欵ててゐたのであります。

その時、講師の聲がほがらかに、このしづけさを破つてひびきました。

〔山梨縣陸軍歩兵二等卒妻大須賀松枝〕
意外の入選者なので、一同は、はつと胸を躍らせました。

軍國の新年歌御會始には、ふさはしいやうにも思はれるし、さりとは又珍しいことであると、誰しもが考へたらしいのであります。

陛下には、御式中は常に御微動だも遊ばされないのですが、この一刹那、御頭を少し御傾け遊ばされ、講師の讀上げる預選歌を、じつと御聴き遊ばさうとなされる御様子で、ありました。

講師の聲は、しめやかにつゞきました。

つはものに召出されしわがせこはいづこの山に年迎ふ
らむ

人も人なり、歌も歌なり、並みあるもの一同ぐつと胸を打た

れたのであります。
 陛下にはこの時極めて御感深く聞し召された御様子に拜
 しました。
 眼前咫尺の間に龍顔を仰いで、陛下のこの御様子を拜し奉
 つた私どもは、思はず胸がこみあげて来て、熱い涙に眼をう
 るほしたのであります。もし御式場でなかつたならば、私
 は取亂して泣いたに相違ありません。
 ○あらたまの年立つ山をみる人のこゝろごころを歌に知
 るかな

この御製は、この歌御會始の終つた後、遊ばされたものであ
 ります。この御製のかげには、かういふ一場のうるはしい
 物語が藏されてゐたのであります。 (明治大帝)

堀口大學

詩人

明治二十五年(三
 五)東京生

一七 雪

堀口大學

雪は降る！ 雪は降る！
 見よかし、天の祭なり！

空なる神の殿堂に
 冬の祭ぞ闌なる！

たえまなく雪は降る。
 をどれかし、頼らよ！

うたへかし、鶴ら、
降る雪の白さの中にて！

いと聖く雪は降る。

沈黙のうちに散る花瓣！

雪はしとやかに

踊りつゝ地上に来る。

雪は降る！ 雪は降る！

白き翼の聖天使！

我等が庭に、身のまはりに、
ささゝやき、歌ひ、雪は降る。

降り来るは恵の麴麴なり！

小さき白き雪の足！

地上にも、屋根の上にも、

いと白く雪は降る。

野口英世

醫學博士・理學博士
帝國學士院會員
博士學位
研究部長
昭和三十五年
福島縣生
福島縣耶麻郡翁島村

福島縣耶麻郡翁島村
猪苗代湖の西北
會津街道の二村
渡邊ドクトル
渡邊 鼎
ハンカチーフ

Seattle
Handkerchief
シヤトル
米國西北海
岸の港
日本郵船會社
汽船發着所
大北鐵道の終點

Philadelphia
米國の東北部にあつて
ク・シカゴに
つゞ大都會
人口二百萬
ペンシルバニア
大學

University of Pennsylvania
米國の醫學者
ベヤンシルバニア大學
教授
ラック長醫學研究
夏三ツ長醫學研究
朝北途博士
明に赴く
夏三ツ長醫學研究
朝北途博士

Flexner (1863-)
米國の醫學者
ベヤンシルバニア大學
教授
ラック長醫學研究
夏三ツ長醫學研究
朝北途博士

巧助所究を朝島夏明
で博士の所東にフ治
あ士であき傳北去イ三究
つは英つ問染里途二長
たた語た所病博中ピ年
めに野のた研士來の研

冬の花瓣の雪は降る！
地上の子等の祭なり！
（詩集―月光とピエロ）

二八 野口英世

明治三十三年十二月五日、野口英世博士は愈、米國に留學すべく横濱を出帆した。母堂もはるゝ郷里の翁島から出て来て、當分逢はれない博士の姿を見守つた。幾人かの見送人に會釋した博士は、さすがに感慨無量であつた。十六歳の春、會津若松の渡邊ドクトルを頼りに村を出て、二十歳の夏から帝都に苦學を續けた身の、二十五歳の今日しも多年の希望が叶つて海外に旅立つのである。

船は埠頭を離れた。ハンカチーフは打ちふられる。丈の低い博士の體軀は、船の進行するにつれ次第に小さくなつて消えてゆく。母堂の兩眼には子の前途に恙なかれと念ずる涙が輝いた。汽船は二十日目に米國シヤトル港に着いた。博士はそこで幾千哩彼方なる故國の空を眺めて孤獨の寂しさを感ずるよりも、先づ異境の新天地に一步を踏入れた誇りかな衝動を満身に感じた。誇りかな心ならず出て来る、感じたまふと、汽車三晝夜、一路北米の大陸を横斷して、博士は直にフィラデルフィア市のペンシルバニア大學にフレキシナー教授を訪問した。教授は博士がその一身を託すべく一刻も早

通譯をつとめ且
同氏の滞在十日
間その案内役を
つとめて知遇を
得た

く面會せねばならぬ米國に於ける唯一の知己であつたのである。



野口英世

壯大な校舎簡素な應接室に於て、博士は夢寐にも忘れなかつたフレキシナー教授の温顔に接した。別來一年半交、至る萬感を抑へつゝ、博士は同大學入學の希望を陳べて指導と助力とを懇請した。

何事も快く引受けた教授が、翌日、大學の總長に交渉すると、この際の入學は許せない、來春の新學期開講まで待てとのことであつた。これには博士も失望した。折しも歳末で

はあり、それはくした雰圍氣の中に立つて、博士ははたと當惑した。

その年も押詰つた三十一日の夜、教授から「ちよつと來るやうに」との使があつた。「何事だらう」と博士は早速出かけて行つた。すると、教授は直に博士を引見して、

「君は蛇毒の研究をしたことがありますか。」

と問うた。博士は以前東京の傳染病研究所にゐた時分、はぶの研究を試みて、これに興味を持つてゐたので、その事

ありのまゝ答へた。教授はこれを聞いて、にこやかに打領き、

「それなら早速蛇毒の研究をお始めなさい。」



はぶ

ベ
ス
ト
桑
港
Pest
北米合衆國
カリフォルニア州の良
港ニヤ州の良
太平洋に面
してゐる

科學研究會
National Academy
of Science

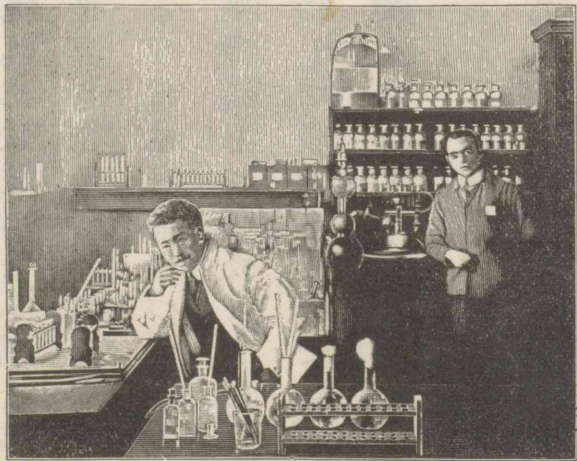
といつて、わが研究室に隣る一室を與へた。博士は大いに喜んで、その翌日即ち千九百一年の元日からその研究室に閉籠り、教授の助手として、朝から晩まで研究に従事した。間もなくフレキシナー教授はペスト撲滅の命を受けて桑港に出張した。一箇月の後教授が歸り來るや、待ちかねてゐた博士は、不在中に研究した業績の幾つかを報告した。教授はその優れた成績に驚き、「君は非凡な伎倆を持つてゐるぞ」と心から感嘆した。

この報告論文の摘要が米國科學研究會の機關紙に載るや、ペンシルバニヤ大學の評判は勿論、米國科學界の異常なる注目を惹き、その結果、同大學名譽總長の斡旋に依つて米國

カー
ネ
ギー
米國の富豪
製鐵王と稱
せられてゐ
る
Carnegie
(1837-1919)

マスター、オブ、
サイエンス
Master
of Science

科學研究會から向ふ一箇年二千弗の研究費を受けることになつた。次いでカーネギー研究所からも約二年間若干の奨勵費を交付された。その後、同大學教授會では満場一致を以て、マスター、オブ、サイエンスの學位を授與することにした。これは同大學の卒業生が受ける特典である。渡米一年ならずして、博士は同大學五箇年の課程を終了した卒業生と同じ實力を認められたわけである。



士博口野の室究研

博士の細菌學者としての位置は目ざましきまでに高まつて來たが、その生活は質素極まるものであつた。博士は、フレキシナー教授の助手として世界を驚かす新研究を重ねていつたが、これに依つて受ける手當は、月額わづかに二十五弗であつた。しかし生活苦は豫期してゐたことだから、別段意に留めず、寧ろ一室を占領して朝から夜まで自由に研究の出来ることを何よりの楽しみとして、科學の三昧境に浸る幸福を満喫した。

Paint
ペイント
ベッキ

日本を立つとき着て行つた一張羅の洋服は、二三年の間に、ズボンといはず、上衣といはず、摺切れてしまつたが、そんなことは一向に無頓着であつた。「おい、君のズボンの臀にペイントが附いてゐるぜ」と友人が眞面目に注意することがあつても、博士は笑つて聞流してゐた。それはペイントではなく、ズボンの破れ穴から下着が喰みだしてゐるのであつた。米國科學研究會やカーネギー研究所から毎年二千弗、三千弗の補助があつても、研究費としては、決して有餘る金額ではなかつた。やゝもすれば、博士は定收の二十五弗をも研究費に割くがために、一日に三度のパンさへとり得ないこともあつた。

博士はフレキシナー教授の助手として、三年を経過した。その間、蛇毒に關するあらゆる試験を遂げた。世界に於ける蛇毒關係の研究は博士の検討に依つて殆ど征服し盡く

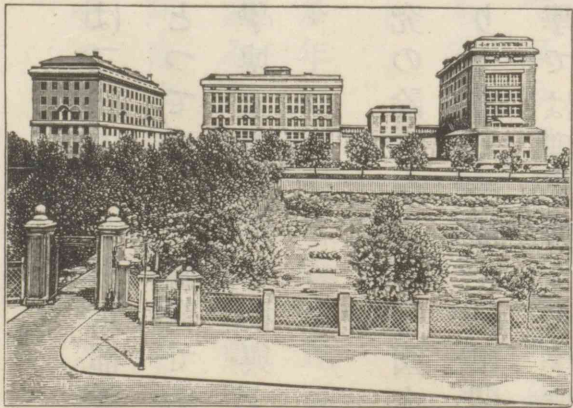
デンマーク
丁抹
ヨロツバ
中部の王国
コペンハーゲン
Copenhagen
デンマーク
國の首府

ロックフェラー
Rockefeller
(1839—)
米國の富豪
スタンダー
石油會社
長
醫學・教育・
慈善事業等
に資を投じ
たことが夥
しい

された。こゝに於て、カーネギー研究所は博士の成績を認め、これを海外研究員に推薦した。かくて千九百三年四月博士は歐洲に渡り、先づデンマークに直行し、コペンハーゲンなる國立血清藥院に入つた。外國人でこゝに入學するのは、博士が最初であつたので、同藥院では非常の好意を以て萬事に親切な指導を與へた。かくて博士は滿一年間同藥院に於て有益な研究をなし、翌年四月、英佛を経て米國に歸つた。當時ロックフェラー氏は最初の資金として百萬弗を投じて醫學研究所を創立し、所長としてフレキシナー教授を招聘することになつた。所長の外七人といふ限られた研究

ボ

所員の一人に日本人たる博士の加はつてゐたことは、米國醫學社會の驚異であつた。研究所に於ても博士は著しく業績を挙げ、見るくうちにその地位を陞せられ、躍進また躍進、千九百十四年には忽ち研究所正員の地位を獲得した。これ實に博士が三十九歳の時である。この時まで博士が完成した新研究は百種以上に達した。他の學者が一生涯かゝつても成し得ない研究を僅か十年の間



所 究 研 - ラ ャ ャ フ ク ャ ャ

に成しとげた博士の精力、知力は到底人間業とは信ぜられないほどであつた。

これより先、明治四十四年に博士は二三の論文を京都帝國大學に提出したが、固より學界にとつて貴重な研究であつたので、大學教授會では論なく、醫學博士の學位を授與することになつた。

大正三年に至り、博士は更に新研究の論文を東京帝國大學に提出した。それは醫學方面よりも寧ろ一般生物に關係を有する発見であつたので、同大學では理學博士の學位を授與した。この二つの事實は、博士が故國に於ても確乎不拔の學者的地位を占めてゐることを明らかに示した。

りあり
してう
めいし

千九百十三年、獨逸國の主催で、柏林に萬國醫學會が開催された。博士は、同學會の招聘に依つて渡歐した。十年前とは事かはり、今度は大醫學者として、又ロックフェラー研究所代表員としての渡歐であるから、非常の光榮であると共に、重大な責任があつたのである。會議は一週間に互つた。博士は、多年の研究に成る豊富な材料を提げて、滔々と發表演説を試みた。會場には歐米諸國はいふまでもなく、日本、支那、南阿、南米等の各代表者が雲の如く來集してゐたが、何れも博士の底知れぬ該博な研究報告に驚き、肅然として傾聽した。次いで講演者に對して各國學者の質問が開始された。博

か

士はこれに對して一々明答を與へたのみならず、獨逸語で質問する者には獨逸語を以て答へ、英語で質問する者には英語で、佛蘭西語で來る者には佛蘭西語で、懇切丁寧に答へた。これには、世界各國の老博士たちも全く感心してしまつた。博士は實にこの醫學會に於ける唯一最大の花形であつた。

博士は、更に英吉利や佛蘭西の學會にも招聘されて、十數回の講演を試みた。「當代醫學界の明星來る」などと、各新聞は筆を揃へて特報した。

當時、佛蘭西大使としてパリに駐劄してゐた石井菊次郎氏が、ある朝、有力な佛蘭西新聞に「日本の生んだ近代の驚異

石井菊次郎
外交官
樞密顧問官
子爵
慶應二年(一八五七)
上總國(千葉縣)
生

野口英世博士來る」といふ三段抜きの大標題で書かれた記事を読んで驚愕したのもこの時である。事實石井大使は野口英世が何者であるかを知らなかつたのである。長い新聞記事を読終つたとき、石井大使は思はず涙ぐんだ。そして、これまでにない日本人としての高い矜持を感じ、日本の名を花の巴里にまで輝かしてくれた博士に心から感謝した。

その夜、博士のホテルに訪ねて行つた石井大使は、博士の手を固く握りしめ、晚餐を共にして、日本人が學術的に世界を壓倒し得ることの實證を示してくれた博士に對する最高の敬意を表した。(橋輝政著、野口英世博士傳に據る)

柴田鳩翁

江戸時代の心學

者

名は亭

通稱は謙藏

天保十年(二四九)

卒

年五十七

贈從五位

兩國橋

隅田川にかゝつ

て日本橋から本

所に通じてゐる

橋

本所

今の東京市本所

區のあたり

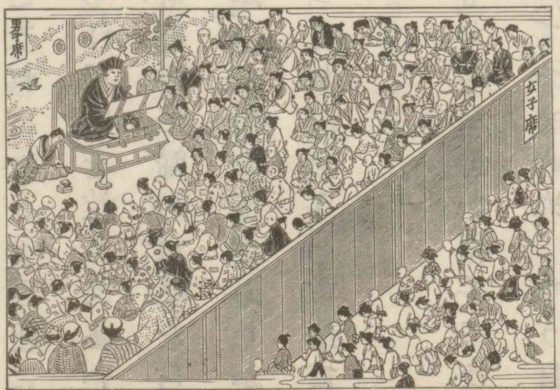
一九 心の洗濯

柴田鳩翁

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日、例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣りあるいたが、どうしたとやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。「これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巢が張る。どうしたらよからう。」と工夫しながら、いつの間にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を、大根大根と賣りあるいた。或御屋敷の表長屋の窓の内から「これ大根屋」と呼ぶ。

「やれ嬉しや、まづ知行にありついた」と呼ぶところを見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が表御門から荷を擔ひこんでお長屋へ廻つて見ると、門口には何某といふ標札が打つてある。

荷を持込んで見れば、縁先の障子をあげ、旦那殿がいま月代をそられたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結びながら、その大根はいくらぢや」といふ。「百に三把でござります」といへば、それは



心の學の講釋

たかい、二十四文づつにしておけ」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下されい。今朝から江戸中を泣きあるいてまだ一把も賣れません。どうしても賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません」といふ。かのお侍かぶりふり、「それでもたかい。まからずば、まづよしにせう」と言捨てて、縁先の障子をはたと締められた。

大根屋も、いろ／＼に言うて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、はて、つまらぬ。もう日の入りには間もなし。なんでも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人が明日の命が繋がれぬ。何としたものであらう。

と、手を組んで思案しながら、縁先の金盥にふつと目がついた。障子は締めてある、あたりに見る人はなし。かの金盥を水の入つたまゝで、大根二三把の下へそつと隠す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が立ちどころに狭うなつて、五尺の身體をしばらくも置くべき所がない。そこで、荷を擔いで門口を出ようとする、障子の内から「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で「まかりません」といふと、「いや、直はねぎるまい。その大根買はう」といひさま、障子をさらりと明けられた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げていなうと思ひ、「何把ほどいりまする。はした賣は出来ません」といふ。「い

やいや、はしたては買はぬ。その大根皆買はう。この縁先へ並べてくれい。』といはれる。さあ大根屋も一生懸命障子の締つてあるうちなら金盃の出しやうもあらうに、今更金盃が出されもせず。』というて、賣るまいとも言はれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。百千萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろくとしてゐると、かのお侍が大根屋の顔をきつと見て、『われはきつううろたへてゐるぞよ。まづ金盃から出して、大根の數をかぞへて見よ。』といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ふたれるかと、わな／＼震へながら、かの金盃を恥づかしさうにそつと出して土に手をつき、旦那様眞平御免なされ

て下さりませ。何を隠しませう、先刻も申しまする通り、今朝からまだ一文の商も致しませず、このまゝ歸りますると、明日親子五人が食べますことがなりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。』と、色青ざめて、土に頭をすりつけて、詫言をする。

かのお侍、思の外氣だてのよい人で、更に立腹の氣色も見えず、『いや／＼、その詫言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よ。』といはれる。こは／＼ながら大根を縁へ積みあげたところが、二十三把。かのお侍、大根賣を呼んで、『さあ、その方が言ふ通り、二十三把、七百六十四文、序に金盃を添へて遣はす。貧の盗とはいひながら、われが根性はよほど汚れてあ

近江聖人

中江藤樹の敬稱
儒者・道徳家
慶安元年(三〇八)

卒

年四十一

贈正四位

橋南谿

宮川春暉

醫師・文人

伊勢に生れ京都

に住む

文化二年(四六五)

歿

年五十三

河原市

滋賀縣高島郡新

儀村安井川の一名

安曇川の北

大津市の東北五

十軒

榎木

滋賀縣滋賀郡和

通村

和通川の北

大津市の東北十

八軒

ると見える。この金盃は顔や手足を洗ふ道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ」と言捨てて、障子を締めて内へはいる。かの大根屋も、これから本心になつて夜晝働き、三年目には遂に相應な八百屋になつたといふこととござります。(鳩翁道話)

二〇 近江聖人

橋南谿

或時、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方、河原市に歸りて、馬のすそを洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。馬方大きに驚き、「今の飛脚の取忘れたるにこそ」と思へば、そのまゝ榎木に走り行きて、

金

小判



中江藤樹書院藏

のまゝ榎木に走り行きて、飛脚の宿れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取出して返しけり。

飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、喜のあまり、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、「もしこの二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん。されば、その

高恩、なか／＼言葉のいひ盡くすべきにあらねども、まづ當座の御禮までに贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大きに驚きし顔色にて、「そなたの金をそなたに取りをさめ給ふに何の禮いふことあるべき」とて、手にだに取らず。色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故已むことを得ず十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々へらして、終には金二歩となし、せめてこればかりは我が心の悦なれば、受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵も寐ねがたし」と、理を盡くし詞を盡くしていふにぞ、「この金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心

鳥目青錢



筆蹟

致良知
良知ヲ致ス

小川村

滋賀縣高島郡青柳村小川

小川村附近



致良知

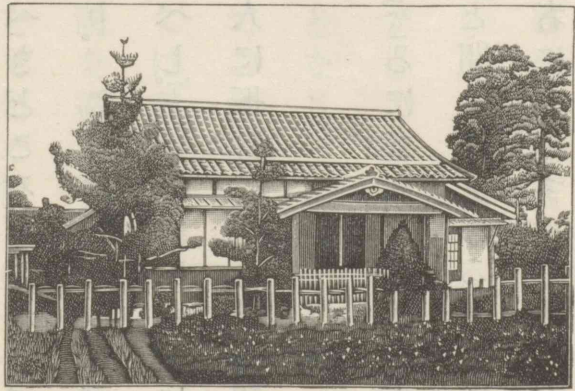
中江藤樹筆蹟

にあらざ。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。これは、今夜休むべきところをこれまで追懸け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば申し請くべし。」といひて、二百文にて酒を買ひ、その家の人に振舞ひ、我も酔ふ程飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはする」と問ふに、「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在

所の近所に小川村といふ處あり。この村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行き

て聞き侍りしに、親には孝を盡くすべし、主人は大切にすべ
 きものなり、人の物は取らぬものなり、無理・非道は行ふべか
 らず。などいふこと、常々語り給ふに
 より、今日の金子も、我が物に非ざれ
 ば、取るべき理なしと心得しまでの
 ことなり。といひすてて歸りぬ。
 飛脚はそれより京へ上りて、いつも
 の宿に到り、さてもこの度は辛き命
 生きのびて、各方にも對面すること
 成りぬ。とて、ありし次第を委しく語
 りけり。折節その家の裏に熊澤次郎八田舎より上りあて



院書樹藤

熊澤次郎八
 字は伯繼
 世に菴山と稱す
 岡山藩に仕へて
 治績をあげた
 元祿四年(三三三)
 卒
 年七十三
 贈正四位

學問修業最中の事なりしが、この物語を聞きて、その人こそ
 まことの儒といふものなれ。とて、その翌日すぐに江州に至
 りて、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき
 程の學徳なし。とて、更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願
 ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母これ
 を氣の毒がり、よしや、まづ内に入れ申せよ。とありし故、いな
 み難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。
 その後、藤樹を備前より招きたまひしに、その身は病身なり
 とて固く辭し、門人熊澤といふものあり、御役にも立つべき
 ものなり。とて熊澤を出されけり。いづれも格別のことな
 り。(東遊記)

備前
 備前侯池田光政
 天和二年(三四二)
 薨
 年七十四
 贈從三位

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年(三三)
三新潟縣生

二 春待つ心

相馬御風

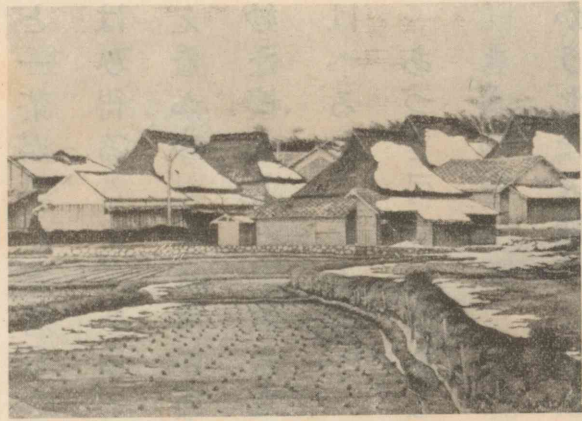
六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にか消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから、殆ど全く人間に氣づかれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか解らぬやうに、無くなつてしまつた。

幾月かの長い間、深い雪の中に閉込められてゐた北國の子供等が、久し振で黒い大地の面を見出した時に歡ぶ有様は、全く言ひあらはしやうのないものである。まだかなり深く消残つてゐる雪の處々に黒く濕つた土が覗き始めると、子供等は申し合はせたやうにつき／＼にそこへ集つて行



雪の家田

良寛
越後の歌僧
天保二年(四九一)
寂
年七十四



残 雪
矢延静外筆

く。そして殆ど躍り出さんばかりの嬉しさうな様子で、土

を踏廻る。田や畑の處々に見え出した黒土の斑点には、鷗や鴉や雀がまづ群をなして集る。彼等の上にもいきくした歡が輝いて見える。むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがりあそぶを見れば

かう良寛が歌つた心もちも、雪國に住んだ者でなければ、深い味はひは分らないであらう。

一茶
小林彌太郎
信濃の俳人
文政十年(三三六七)
歿
年六十五

「長々の月日、雪の下に忍びたる落蒲公英のたぐひ、やをら
春吹く風の時を得て、雪間々々を嬉しげに首さしのべて」
と一茶が書いた若草の歡も、雪國に住む者のしみとくと味
はひ得ることである。大地を踏歩く人の足音の久しく聞
えなかつたのを靜かな夜にふつと聞きつけた時の一種微
妙な懐かしみと歡、そんな心の經驗も、雪國に住めばこそ味
はへるのである。

あづさ弓春になりなば草の庵をとく訪ひてまし逢ひた
きものを

かうした人間味の極致を示したやうな秀歌の良寛にあつ
たことも、北國の冬といふことを全然頭に入れないでは、な

かなか理解されまいと思ふ。

全く北國の住民の春を待つ心には、生そのものの味はひの
測り知れない深さが窺はれるのである。(樹かげ)

三三 鎌倉

正岡子規

一番の汽車にて鎌倉に赴く道々、浮み出づる駄句の數々。

岡あれば宮宮あれば梅の花

家一つ梅五六本こゝもこゝも

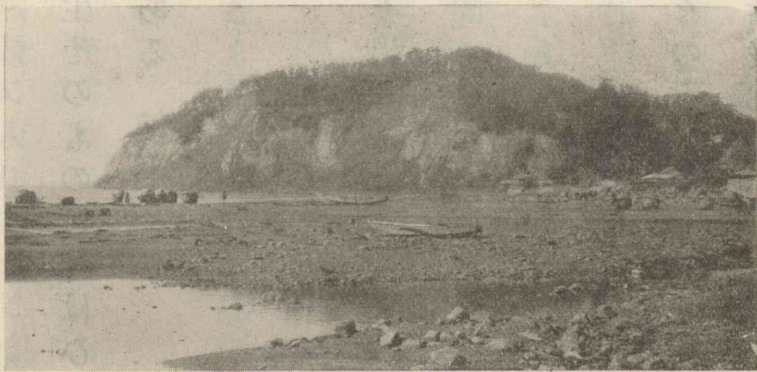
旅なれば春なればこの朝ぼらけ

先づ由比濱に隠士をおとづれて、久々の對面嬉しやと、とつ
おいつ語り出すことは何ぞ。歌の話、發句の噂に半日を費

正岡子規
名は常規
俳人・歌人
伊豫國(愛媛縣)
生
明治三十五年(一
九〇二)歿
年三十六
鎌倉
神奈川縣鎌倉郡
鎌倉町
由比濱
鎌倉町の海岸
西の方稻村が崎
と東の方飯島崎
との間の遠淺の
濱

鶴岡
鶴岡八幡宮
國幣中社
鎌倉町雪の下に
鎮座
祭神は應神天皇
神功皇后等

したり。即景、陽炎や小松の中の古すゝき
春風や起きも直らぬ磯馴松
獨りふらくと浮かれ出でて、繩手
傳ひに歩めば、行くともなしに鶴岡
にぞ着きにける。銀杏を撫で、石段
を攀ち、廣前に額づきたる後、瑞垣に
よりて見下せば、數百株の古梅や、
盛を過ぎて、散りがてなるもあはれ
なり。
銀杏とはどちらが古き梅の花



濱が比由

建長寺
鎌倉五山の第一
臨濟宗建長寺派
の大本山
北條時頼開基
大覺禪師開山
鎌倉郡小坂村山
内にある
圓覺寺
鎌倉五山の第二
臨濟宗圓覺寺派
の大本山
北條時宗開基
佛光禪師開山
鎌倉郡小坂村山
内にある
星月夜の井
鎌倉の名所
鎌倉十井の一
鎌倉町坂の下に
ある
長谷の觀音堂
新長谷寺
鎌倉町長谷小路
の西なる丘上に
ある
本尊は觀世音菩
薩

建長寺に詣づ。數百年の堂宇、松杉苔滑らかに露深し。

陽炎となるや減り行く古柱

圓覺寺は木立晝暗うして、登りては又登る。山の上、谷の陰、
草屋藁屋の趣も尊げなるに、坐禪觀法に心を澄ます若人こ
そ殊勝なれ。

その夜は由比の浦浪を聞きつゝ、夜一夜旅の疲の寢心に、く
たびれたる兩足踏みのぼしし心よさ。曙の頃、隱士と某と
三人して、濱邊より星月夜の井に到る。

鎌倉は井あり梅あり星月夜

長谷の觀音堂に詣づ。見渡す山の名所古跡、隱士が指さす
杖の先一寸の内に集りたり。

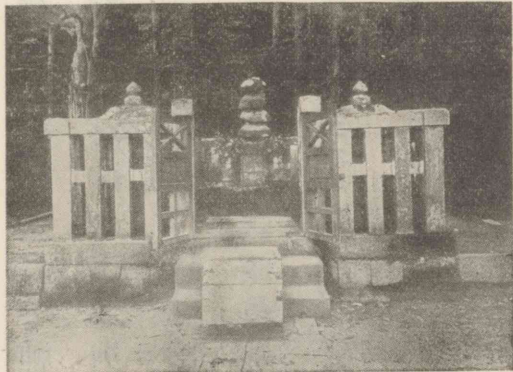
日蓮 日蓮宗の開祖
安房國(千葉縣)生
弘安五年(一九三)寂
年六十一
日蓮 高僧
日蓮門下六老僧の
一 下總國(茨城縣)生
元應二年(一九〇)寂
年七十八
大佛 鎌倉町長谷高德院の庭中に露坐する阿彌陀如來の像
建長四年(一二三)鑄造

歌にせん何山彼山春の風
「こゝは何、かしこは何、日蓮の高弟日朗の土窟はこの奥なり。
など、一々に隠士の案内なり。
大佛は昔に變らぬ御姿ながら
も、その御心には數百年の夢幻
何とか觀じ給ふらん。昨日見
し人は今日見る人にあらず。
今日見る人は明日見ん人にも
あらず。まして今の人七百年
の昔も知らねば、七百年の昔、い
かでか今の世を推量らん。



鎌倉大佛

大佛のうつらくと春日かな



源頼朝の墓

この夜はまた隠士の家に宿る。浪
音高し、潮や満つらん。と頻に口ずさ
みて、上の句置煩へる隠士の聲ほの
かになりて、我が夢はいづくの山を
かかけめぐりし。翌日は雪の下に
古跡を探る。興亡の感くさくさに
起りて、そとろに胸を衝く思なり。

高殿の三つば四つばのあと訪へば春の二葉にひばり鳴
くなり。
いつの世の庭のかたみぞ賤が家の垣根つゞきにほふ

雪の下
鎌倉町の大字
鶴岡八幡宮など
の所在地

頼朝の墓
鎌倉町法華堂址
の背後の丘上に
ある

鎌倉の宮

官幣中社

鎌倉町二階堂に

鎮座

祭神は護良親王

土佐の大名
土佐藩主山内氏

梅が香
頼朝の墓こゝぞと上り見れば、鳶にからまれ、苔むしたる五輪の塔一つ。嗚呼、これが日本總追捕使の奥都城なるか。鎌倉の宮に詣でて神前にひざまづけば、何とはなしに、はや胸ふたがりて、はふり落つる涙拂ひもあへず。梅が香にむせてこぼるゝ涙かな（子規全集）

二二 眞劍勝負

昔、土佐の大名に抱へられてゐた一人のお茶坊主があつた。茶道にかけては一かどの達人で、お茶の好きな殿様の大のお氣に入りであつた。

この殿様は、御在國の間は朝夕このお坊主のたてた茶を心ゆくばかり味はふことが出来たが、さて江戸勤番の時になると、その自由が利かない。といつて、江戸まで召連れても行かれないので、いつも不自由を忍んでゐた。今年もまた御勤番になつた。お坊主を國に残しかねた殿様は、とうとうそれを武士の姿に仕立てて、お伴に加へた。髪もまだ十分には伸びきらず、刀をさした腰附も極めて怪しくて、誰の目にも生來の武士とは見えない。ましてお茶坊主自身には、殿様の仰とはいへ、お坊主の身で士分の姿をすること、何としても氣が咎めて恥づかしく、太刀打の一手も知らずに大小を帶することをば、如何にも心苦しく思つ

てゐた。そんな次第で、江戸到着後も物見遊山などは思ひもよらず、いつもお屋敷にばかり引込んでゐた。これ程に身の程を辨へてへりくだつてゐるものだから、御家中の人も、お坊主のこの度のお伴を、心から氣の毒がらぬ者はなかつた。

或日、よんどころない用事で、思ひきつて上野まで遠出した。「武士姿になつて威儀は整へては居るものの、鏡に映る自分の影に恥づかしく、落着のないこのさまが、他人には如何にあさましく見えることだらう。」などと思ひながら、山下（下）を不忍池の端まで來た。「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」と、さる俳人が詠んだほどの江戸の賑に、お國者のお坊主は目を

上野

今の東京市下谷
區上野公園の
あたり

不忍池

上野公園の山下
にある池

さる俳人

榎本其角

蕉門十哲の首

寶永四年（三六七）

歿

年四十七

辨天様

不忍池の中島に
ある小祠
辨財天を祀る

まるくして、たゞ驚くばかり、足どりもしどろに辨天様の前までやつて來た。

一癖ありさうな浪人體の男が、先程から、そこなる石に腰うちかけ、相手ほしげに、道行く人を見守つてゐた。茶坊主がその前を通りかゝると、件の武士はづかゝと進み出で、一禮して、

「あいや、暫く、これは近頃失禮の儀でござるが、某は諸國遍歴の武藝者、御身を土州の御家中と見てのお願い、何卒眞劍をもつて、一手御指南に預りたうござる。」

と、作法正しく申し出でた。お坊主は驚くまいことか、江戸とはかうした怖しい所かと、とかくの返事にも及ばず、まご

まごしてゐると、武士は得たりと言葉を卑うし、
「未熟者のたつてのお願い、お聴濟下さいまするなら有りが
たき仕合に存ずる。」

と、その答を促して來た。この武士は、もとく心からの武
藝精進の者ではなく、お坊主の髮形で土佐の藩士と判じ、土
佐の武士には人から物言ひかけられると一步も後へは引
かぬ氣風があることを知り、その如何にも弱々しげな態度
を見て、難題を吹きかけ、幾らかの酒手にするか、でなくとも
少々からかつて遊んでやれといふ悪い出來心からの仕向
なのであつた。

お坊主は絶體絶命、一命を捨てるより外に道はない。この
時ふと我にかへつて、「これも時の災難として、捨てる命に未
練はないが、自分も土佐の侍のはしくれ、腰の大小の手前と
しても、見苦しい振舞をしてはならぬ。とはいへ、今どうし
て死んだら、この場合武士の最期として面目を保ち得るか。
先づそれをきはめて、死後に恥を残すまい。幸ひ、今しがた
通り過ぎた道に、劍道指南の看板があつた。その師範にす
がつてこれを學び、その上で立合ふことにしよう。」と腹をき
めた。そこで容を改めて、
「いかにも拙者は土佐の藩士、御邊はいづれの御藩かは存
ぜぬが、たつての御所望につき、未熟ながらお相手致すで
ござらう。さりながら、只今は主命によつてお使にまゐ

る途中、主命を果した上、こゝにてお立合申すことと致さう。一時ばかりお待ち下されい。」

といつて承諾した。「さては言葉巧に逃げる氣だな」と武士は思つたらしいが、色にも出さず、

「早速の御承引、千萬忝い。」と立ちかゝり、

と挨拶した。お坊主は上野の山をまはつて、山下に來た。劍道指南の玄關に立つて、あわたゞしく案内を請ふと、取次の者が、

「師範は今日御病氣、面會は一切お斷りでござる。」

「某の命にかゝはる一大事、武士の情に、しばし御面談が願ひたう存じまする。」

赤心を面にあらはしての言葉に、取次も斷りかね、そのよし師範に通じた。

「何事かは知らねど、命にかゝはる一大事とあれば逢はねばなるまい。失禮ながらこゝへお通し申せ。」

との事に、取次の者はお坊主を寢所へ案内した。

お坊主は先づ初對面の挨拶から、身にふりかゝる一大事のあらましを語つた。師範は床の上でこれを聞きながらも、その起居振舞から言葉まで、これはたゞの侍ではないと見て取つた。

「たゞこの上のお願には、かゝる場合に、如何にして相果つるが武士の最期として恥づかしくないか、その御指南に

従つて討たるゝ覺悟せめては死後の名を惜しみたう存
じまする。」

と、率直に心の底を打明けた。

師範は感じ入つて、

「ほう、その許には、武士としての死方が教はりたいと仰せ
らるゝか。これは近頃殊勝の至。この道場に來る者も
多いが、死方を學ぼうといふ者は、そのもとが始めてぢや
いや、病中ながら喜んで教へて進ぜよう。しかし見受く
る所、そのもとは本來の武士ではござらぬ。失禮ながら
御身分は。」

と尋ねると、

「御目がね恐れ入ります。某事はさる藩中の茶道にて、
ついこの程主君のお伴をいたして江戸に到着したばか
りの者。」

と言はせも果てず、師範は

「うむ、道理で。」

と膝を打つて、

「早速ながらそのお茶を一服所望致す。最後のお手前拜
見申さう。」

お坊主は、

「仰のまゝに。」

と一禮して、一舉一動、最後の一念をこめて、お茶をたてた。

師範はまじろぎもせず、じつとその手前を見つめてゐたが、その死の目前にあることも忘れて捌くたて方に、道に至れる者は、かうもあるものかと、ほとく感歎した。

「いや、そのもとははもはや何も教へるには及ばぬ。」

「それはまた何故でござりまする。」

「そのもとは茶道によつて剣道の奥義をきはめてござる。道は一つだ。さて武士として恥づかしからぬ死方は。」と言つて、次のやうに教へた。

「まづ敵の面前に行つて、落着き拂つて、久しく待たせたお詫をなさい。この時、敵は必ずせきこんで来るであらう。が、それには少しも構はず、更に落着き拂つて、羽織をぬい

上段
剣道の構方の一
刀を頭上にあげ
た構方

で、本だたみにたゝみ、煙草入をぬいて、その上に置き、靜かに袴の股立をとり、襷をかけて、後鉢巻をなさい。用意が十分に出来たら、「いざ、お相手仕らう。」と、作法のとほり身構へて、太刀を引抜き、上段にふりかぶつて、そのまゝ眼を閉ぢてしまひなさい。如何に敵が氣合をかけたればとて、これに心を亂してはなりません。敵がどこかを斬るか突くかしたら、その時、處選ばず打下しなさい。さすれば相撃となつて、たとひそのもとは斃れても、武士としては少しも恥辱ではござらぬ。この事必ず疑つてはなりません。また他念を交へてもなりません。お坊主は、この話を聴き終ると、今はもう遙かに生死を超越

して、全く大安心の境地に達した。
 「親身も及ばぬ御親切なる御教訓、この世の縁がうすくて、お報いすることは叶ひませぬが、未來永劫、生々世々、今日の御高恩は決して忘却仕りませぬ。」
 と涙ながらに暇乞して、池の端に引返して行つた。
 件の武士は先程から待詫びて、「はや約束の一時も過ぎたに、まだ歸つて來ないのは、必定かの腰拔奴は三十六計の一手を出したと見える。やれ、いらぬ暇潰しをした」と呟きつゝ立上らうとする所へ、丁度お坊主が歸つて來た。ねんごろに一禮して、久しく待たせた失禮を詫びる、その態度が、既に別人のやうであつた。武士は案に相違して、いかな

三十六計
 三十六計逃ぐる
 に如かず(俚諺)

正眼

劍道の構方の一
 刀の柄を腹部の
 中心におき切先
 を敵の眼に對せ
 しめるもの
 上段下段に對し
 て中段ともいふ
 大上段
 刀を高く頭上に
 あげる構方

る腕前の人かと、やゝ怖氣がついて來た。
 次いで、いざ御用意。といつて、準備に取りかゝつた土佐の侍の様子に注意してゐると、羽織のたゞみ方から、禪のかけ方、股立の取方まで、すつかり手に入つたもの。殊にその態度の堂々たるには、驚くの外なかつた。
 武士は引きずられる思で、恐るゝ立合の座に直つた。武士は正眼につけて、氣合をかける。お坊主は大上段にふりかぶつて、氣合一つかけない。武士は、相手に乗すべき一點の隙もないのを見て、先づ氣を吞まれてしまつた。それよりも相手が目をつぶつて水のやうな冷靜さにあるのを見た時には、もうすつかりその身が硬くなつて、手足の自由も

利かなくなつて行くやうに思はれた。武士はもはや斬込む元氣も失せはてて、いよ／＼窮してしまつた。

物見高いは都の常、武士の眞劍勝負だといふので、遠卷に人の山が築かれた。もとより劍道の心得のある者もまじつてゐるので、口々に、



眞劍勝負

「天上段の武士のあの構はどうだ。鶉の毛でつく程のす

きもない、氣合一つかけず、かはつてゐるね。」

「おや／＼／＼、天上段の武士は目をつぶつてゐるぞ。なめてゐるね。」

「あれぢや叶はない。いくらあせつたつて、天邊から段が違ふ。」

「正眼の武士に胴ぶるひが來たぞ。」

「打ちおろせ、今だ／＼。」

茶坊主はたゞ一念、打下す機會の到來をのみ待つてゐた。人の聲など何で耳に入らう。武士は汗が額からたら／＼と流れて來た。息もはずんで來た。この不動天上段の太刀筋に、どうして斬込むことが出來よう。「いらざる挑ひだ

てをして、取返しをつかぬ破目になつた。と、今はもう生きた心地もない。

武士はとうとう刀をかりりと投出して、

「まゐつた。恐れ入りました。命ばかりは……。」

とおろろと聲で詫びてゐる。お坊主はまだ振上げた太刀を下さない。見物は、餘りのをかしさに、どつと笑つた。

その笑聲に、お坊主は目を開いて見ると、何事ぞ、正眼につけてゐた筈の相手の武士が、兩手をついて詫びてゐるではないか。しかも、その言葉を聞くと、

「先程の失禮、何とも申譯ござらぬ。見事なお手の中、誠に恐れ入りました。何卒御尊名をお聞かせ下されい。」

齋藤拙堂
名は正謙
伊勢津藩の儒者
慶應元年(二三五)
卒
年六十九
贈正五位

慶長
後陽成・後水尾
兩天皇の御代の
年號(三五六―三
七四)

元
元和
後水尾天皇の御
代の年號(三三五
―三八三)

お坊主はまるで夢心地、しかし様子はほゞ察せられるので、

「なに、名もなき者で……。もとゝ當方より好んでの事ではござらぬゆゑ、尊公から刀を引くとあれば……。」

と、身支度もそこゝに、土佐の屋敷へ引上げていつた。

その頃誰言ふとなく、お茶坊主の眞劍勝負として、江戸市中を賑はした話題の眞相は、正に右の如きものであつたとか。

(蘆田惠之助の文に據る)

二四 山田長政(原漢文)

齋藤拙堂

山田長政は駿府の市人なり。少くして大志あり、好んで書を讀み、兵事を談ず。慶元の際、天下始めて定まり、士の仕を

暹羅 アジヤ洲の
一獨立國
印度支那半
島の中部に
ある

Siam

六昆 今のマレー
半島の中部
の地

Ligor

求むる者皆侯伯に求む。長政屑しとせずして曰く、此の間
功名を立つる處無し。唯海外に遊ばば、或は以て吾が志を
展ぶ可きのみと。時に下海禁なし。府に經商二人あり、瀧
と曰ひ、太田と曰ふ。將に海に航して臺灣に回易せんとし、
舟を大阪に艤す。長政之に附乗せんと請ふ、二人許さず。
長政乃ち先づ大阪に到り、二人の舟を求め、入つて匿れぬ。
既にして二人至り、帆を揚げて發す。長政乃ち船間より出
でて、前請を重ぬ。二人大いに驚けども、之を如何ともする
こと能はずして、之を許す。既に臺灣に到り、又蠻船に附し
て、西暹羅に遊びぬ。
會、邦内騷亂し、四鄰交、侵す。而して六昆最も強し。暹羅の



山田長政
淺間神社藏

國主、師を出して之を禦ぐ。長政其の行軍の紀律なきを見
て、私に其の必ず敗れんことを言ふ。既にして果して然り。
人或は其の語を傳へて國主に聞す。國主之を奇とし、長政
を召見して、方略を問ふ。長
政指畫して策を陳ぶ、鑿々用
ふべし。國主大いに喜び、長
政を擢でて上將軍と爲し、往
いて六昆を禦がしむ。時に
本邦人の暹羅に流寓せるもの衆し。長政數百人を糾合し、
雜ふるに土兵を以てし、亡慮萬餘人。皆日本の裝を爲し、日
本の援兵大いに至ると聲言す。六昆の軍沮む。因つて兵

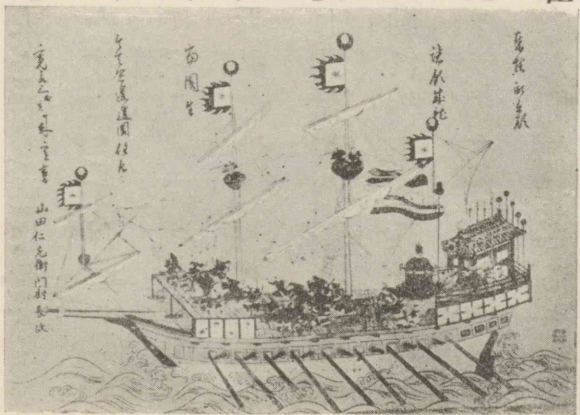
を縦つて奮撃し、大いに之を破る。六昆王憤ること甚だし
く、國を傾けて來寇す、兵數十萬。長政曰く、敵衆強盛なり、與
に鋒を争ひ難し。唯謀を以て之
を撓さば、之を破らんこと易々た
るのみ」と。乃ち軍を分つて三と
爲し、一は山陰に伏し、一は海岸に
蟻す。長政親ら其の一を率ゐて
海陸の間に出で、進んで挑戦す。
兵既に交はり、佯つて敗走す。六
昆の兵之を追うて將に及ばんと
す。號砲俄に發し、海陸の二軍吶喊して齊しく進み、火鎗亂



淺間神社

發す。長政機を視て之に反し、敵軍を衷にし、前後より之を
撃ち、大いに六昆の兵を敗り、數萬人を殺し、遂に北ぐるを追
ひ、長驅して其の都に入り、六昆王を擒にして以て歸る。威
遠近に震ひ、四鄰争うて款を暹羅に送る。國主大いに長政
を賞し、妻はすに其の女を以てし、六昆の地に封じ、號してア
ン普拉と曰ふ。アン普拉とは、蓋し諸侯王の謂なり。
久しうして國主年既に高く、頗る勤に倦み、長政をして國事
を攝行せしむ。こゝに於てアン普拉の名、印度諸國に噪が
し。而して本邦は地隔遠にして、未だ聞知せざるなり。數
歳ありて瀧太田、また海外に回易し、行いて暹羅に到る。既
に其の界に入れば、迎勞の使沓至し、相迎へて館に入る。少

くありて吏あり、來り戒め、王二人を召見すといふ。二人初め其の故を知らず、心頗る疑懼せり。且く吏に従ひ入つて見ゆ。王冠服して交椅の上に在り。金珠目に粲として、儀衛甚だ盛なり。二人俯伏膝行し、敢へて仰視せず。退いて館に就くに及び、飲食供御、貴客を待つものの如し。意益安んぜず。既に夜なり。また更に傳呼して至るものあり、曰く、「王來る」と。二人驚いて出迎ふれば、王便服して入つて坐し、笑つて二人の肩を拍つて曰



山田長政獻納の軍艦圖
淺間神社藏

淺間の神
淺間神社
官幣大社
静岡県富士郡大
宮町櫻ヶ丘に鎮
座
祭神は木花咲耶
姫命

く、「故人恙なしや」と。二人愕眙して仰ぎ視れば、乃ち長政なり。長政自ら備に其の發跡の由を説く。二人叩頭して謝して曰く、「鄙人愚蒙嘗て塵埃の中に相従ひ、無禮にして罪を獲たること多し。意はざりき、大王能く自ら青雲の上に致さんと」と。長政曰く、「予の今日あるは、實に二子の賜に由る。抑、人我に徳あれば、報いざるべけんや」と。既に罷め、厚く賜うて之を遣る。本邦の商旅之を聞き、多く暹羅に遊ぶ。長政皆善く之を遇せり。長政富貴なりと雖も、常に桑梓を懐ひて置かず。戦に臨む毎に、遙かに駿府の淺間の神に禱り、軍輒ち勝つ。是に至り、工に命じて當時戦艦の状を摸繪せしめて扁と爲し、商舶に附して淺間廟に獻じ、以て報賽せ

ローソップ島
太平洋中我が委任統治の島

服部忠彦

天文学者
東京帝國大學理
學部助手兼東京
天文臺技手
明治四十一年三
月(東京生)

軍艦

春日

上陸した時

昭和八年一月二
十四日

椰子



パン



り。

二五 ローソップ島の日食 服部忠彦

一週間以上も軍艦に揺られて、やつと揺れない土地、このローソップ島に上陸した時、何といふ頼りない感じがしたことであらう。環礁に囲まれたこの島に打寄せる怒濤はな
いが、海拔一米、ちよつと駈出すと、こちらの海岸から向ふの海岸につきぬけてしまふ。しかし上陸して十日もたつた今日は亦一の樂土となつて來た。咽喉が渴けば椰子を切つてあの甘い汁を飲み、腹がすけばパンの實、タコの實を食ふ。島民は色こそ黒く、裸足でこそ居るが、その穩かなまな

タコ



ウルトラマリン
Ultramarine
紺青
群青

ざし、物靜かな動作、殊に子供のかはいゝこと。我々が道を通ると遙か彼方から飛んで來て、「今日は。」と挨拶する。

島に着くと、我々一行は直に天幕を張り、荷を解いた。東京の一行が陣取つたのはローソップ島の西海岸。砂は珊瑚の破片で眞白、海の色はウルトラマリン、刷毛でさつと刷いたやうな大まかな緑の椰子の色、三十五六度の炎天に反射する白い砂。見る物毎に物めづらし



観測隊のテント

ヌー
椰子の實
ローソップ
語

Concrete
コンクリート

からぬはない。一汗流してはヌーを貪り食ふ、その特有な臭氣も今は何のその、内地に歸つたら土人臭くなつたと言はれようが、今の椰子の汁一杯の味はたまらない。それ〴〵地割も定まり、土臺のコンクリート工事も出来て、大體機械の据付も終つた。これから試験にかゝるのだが、天氣の具合がどうも心配である。この島に着いてから一日中晴れたのは二日ぐらゐしかかない。その晴れた日でも、東北に黒い雲がちよつと出ると、「それ来るぞ」と器械に覆をかぶせる隙もなく、さつと物凄い豪雨がやつて来て、からかになつてゐる天水槽を満たしたかと思ふと、白い砂に反射して、太陽がぎら〴〵輝き始める。

カノーパス
天空上シリ
ウスに次いで
光輝の強い
恆星
Canopus
支那で南極
老人・老人
星など呼ぶ
もの
南十字
南天の星座
の名
肉眼で見え
る星の数は
五十四箇
Crun

臺長
東京天文臺長
理學博士早乙女清
房

内地で見えるとか見えないと騒いだカノーパスが高く見えても、大した興味も引かず、夜半から南の水平線低く昇つて来る南十字の燦然たる様子も、見なれてしまへばさう騒ぐ程でもない。内地に居るとき寫眞を撮るのに邪魔になつた月も、椰子の葉の間から見れば、非常に興味深いものとして見られ、高く中央にかゝつてゐる。この月が段々虧けて行つて終に見えなくなつた時、待ちに待たれるその日が来るのだ。一行中、日食の經驗者は臺長一人であとは若い者ばかり、初めての經驗に天氣よかれと、科學者も今は神に祈るより外はない。

Chronometre
クロノメータ
 經線儀
 主として航
 海用及び天
 文學用に供
 する正確な
 時計

今日は愈待ちかねてゐた二月十四日、昨夜の續きて朝から
 天氣は非常によい。この分ならば先づ大丈夫であらうと、
 不足勝の水に口を清めて機械の覆を取り、時間の來るのを
 待つ。我々の歸りを待つ平榮丸、瑞鳳丸も船首を並べて碇
 泊し、乗組員一同は千載一遇の好機を逸すまいと、東京天文
 臺の觀測地近くに、手にく、煤硝子を持つて時の來るのを
 待構へてゐる。東京天文臺のすぐ後にある海軍技術研究
 所、遞信省等は既に仕事を開始して、忙しく號令のかゝつて
 ゐるのが聞える。じつと時計を見つめてゐる。五分前三
 分前、望遠鏡にしがみつく。周圍が静まり返つてゐる中に
 クロノメータの音のみ響く。太陽の縁、豫定の個所に黒い

Coronagraph
コロナグラフ
 コロナを撮
 る寫眞器

Shutter
シャッター
 寫眞機の附
 屬器具
 迅速にレン
 ズの蓋を開
 閉する装置

影、初虧だ。と思ふと、誰かの「虧けたく」と呼ぶ聲が聞える。
 ほつとして望遠鏡から眼を外らす。しかし仕事はこれか
 らだ。皆既までには一時間半もあるので、じつと心を落着
 けて一服する。時々黒眼鏡を通して太陽を仰げば、二分三
 分と段々月の影が増して行く。半ば以上隠された頃には
 常夏のこのローソップ島に冷々とした風が吹渡り、段々と
 薄暗くなつて行く。何處から飛んで來たのか、一群の鳥が
 ばたくと通り過ぎる。雞がけたましく鳴く。鬼氣迫
 る思だ。それと配置について天を睨んでゐる。部分日
 食を撮つてゐる十一米のコロナグラフでは何回もシャッ
 ターの音が聞える。時間も迫つたので時計装置を調査し

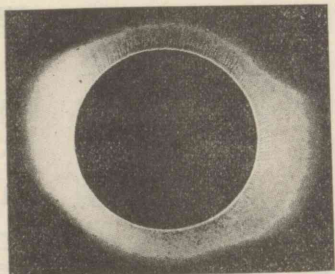
コロナ
白光彩冠
皆既日食の
際太陽の周
圍に見える
銀白色の美
しい光芒

最後の配備だ。望遠鏡を覗くと、太陽は既に大部分隠され、弓形になつた細い線が見え、端の方からぷくりくと切られては消える。時間が非常に長く感じられ、シャッターを持つ手がかすかに震へてゐる。最後に一點、二點残つた光がすうつと消えて行く。夢中でシャッターを切る。露出を終つてふと天を仰ぐと、眞黒な太陽の周圍に圓く光つた内部のコロナ、東西にさつと延びた薄い外部のコロナ



日食の観測

ダイヤモンド
金剛石



コロナ島の皆既食

が鈍い金属性の光を放つてゐる。黄でもない、緑でもない、強ひて言へばその中間か。星が見えるあたりは相當に暗いが、見えない程ではない。満月の時よりもまだ明るい。周圍は静まりかへつてゐる。あつと思つた瞬間に太陽の強い光が出る。内部の強いコロナの光はまだ見えてゐて、丁度ダイヤモンド入りの金指環を見てゐる様である。終つたのだ。多額の費用と多大の勞力とはこの二分間で報いられた。依然として好天気である。時々一塊の雲が通るが、一瞬にして行過ぎる。皆集つて寫眞を撮つたり、今一瞬前の光景を思ひ浮べ

プロミネンス
光焰
太陽面上に
浮遊する紅
色の雲状物

ビール
Beer

たりしてゐる。そのうちに太陽は段々と光輝を取返して行く。「日食観測に行く者は日食が見られない」といふが、本當である。大抵の人は皆既の状態を全部見てゐない。太陽が隠された瞬間、眞紅のプロミネンスが見えたのであるが、これを見た人は少数である。十一時半頃から又望遠鏡に見入つて最後の復圓の時間をとる。平和なローソップには、何事もなかつた様に、白い珊瑚の砂に強い太陽の光が反射して、じり〜と暑さが感じられる。一息ついてゐると、天候が段々悪くなつて来て、晝食後は強い雨が來た。一同幸運を夕食のビールで祝ひ合ひ、興奮のまだ醒めやらぬ綿の如く疲れた身體を無理にべ

ベッド
Bed
臥床

ッドにもぐり込む。

二月二十日の早朝にこの島を出發しなければならぬ。我は、休む暇もなく荷造にかゝる。すつかりお馴染となつた島民たちと、或は日本語で、或はローソップ語で笑ひ興じながら、さつさと仕事を進める。若しも曇つたらこれ程までに渉るまいと思はれる程、仕事片付いて行つて、十九日の午前中には今までの天幕や小屋はきれいになくなり、持込んだ杭とコンクリートの土



景風島ブッソーロ

臺だけが寂しく残つてゐる。日暮一同教會前に集つて島民と別れの挨拶、子供たちが合唱する別れの歌。

神共に

讚美歌
第三百九十二の
第一節

神共にいまして
行く途を守り、
あめのみ糧もて
力を與へませ。
又逢ふ日まで、
又逢ふ日まで、
神の守、汝が身を離れざれ。
又逢ふ日まで。本當だ、又何時の日逢へることか。夕闇が迫つて、人の顔も殆ど分らなくなり、哀愁を帯びた讚美歌の



日食観測の後晩餐

聲のみ響く。眼頭が熱くなつてくる。僅かの期間の知合ではあるが、永遠の別れであると思へば、又感慨無量である。最後に一言、互にさやうならと頭を下げる。一同聲が出ない。(軍艦春日にて)

二六 伊能忠敬

幸田露伴

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美はしく果さんことを期しむたりき。凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一舉手

伊能忠敬

地理學者
天文學者
上總國(千葉縣)
武射郡小堤村神保貞恆の第三子
下總國(千葉縣)
香取郡佐原町伊能氏を嗣いだ
卒
文政四年(二四八)
年七十七
贈正四位
幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年(三五七)
江戸生

一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することにのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へてわが爲すべきことを爲すは、その人晉に才氣あるのみならず、亦實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら成



伊能忠敬
佐原町伊能氏藏

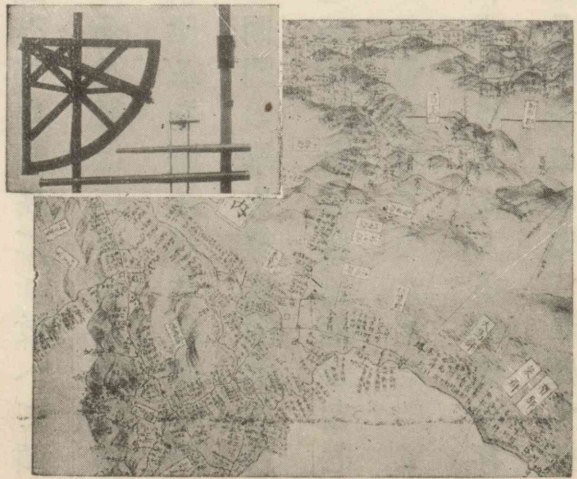
功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡くし難し。忠敬が算數・曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く只管その家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の太なるを見るべきなり。かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務はこゝに於て圓滿に果されたりといふべし。忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五

十歳常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり、爲すある人には、如何なる場合もわが力を試むべき所たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

さる程に忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を

高橋作左衛門
名は至時
曆學者
文化元年(三四四)
卒
年四十一
贈從五位

出で、都門に遊びて師を尋ね學に就く書生と異なるところは、唯その若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。折柄幕府には曆法改正の舉ありて、これが爲、特に大阪より高橋作左衛門といふ者を召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して直に師弟の契を結び



伊能忠敬の測圖と測機

ぬ。時に忠敬は五十歳にして東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、假令己が學業などその人に及ばずとも、猶強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかてか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき、喜びてそれが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして弟子たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實に何れの世にありてもかゝる事實の存するがためなり。これを以て、非凡の士にあらざれば大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱きて墓穴に入るに至るなり。本來の上よりいへば、老いて學ぶはたま〜その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可かあらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。

思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば、忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明らかなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその年五

十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色満面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ、これ豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。(露伴叢書)

二七 死して惜しまるゝ人となれ

嘉納治五郎

教育家・體育家
貴族院議員
東京高等師範學
校名譽教授
講道館師範
萬延元年(一八六〇)
兵庫縣生

嘉納治五郎

人生れて呱呱の聲を發してより、長じて一箇の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の道を知らず、たゞ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。この間、晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。これに次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に説くに道徳を以てし、必要なる學術上の知識

を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨

立する基礎を成さしむるものは、我が師長に
あらずや。

更嘉に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈
なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖
徳を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關
は生民の安寧を維持し、その福祉を増進し、兇
惡を正し、不逞を罰し、我が父母師長をして我
等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、我等
をして危難を憂へずして安全なる發育を遂
ぐるを得しむ。然らずんば、我等は亂離塗炭

精力善用

歸一齋

筆

嘉 納 治 五 郎 筆

の苦に陥らん。我等の安全なる發育を遂げて一箇の成人
となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等
が成人の後に於て此等數者に酬ゆるは、人間當然の義務に
あらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或はその修養の時
期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒に
長じて、當に自營自活以てわが生育の恩に報ゆべき時に至
りても、無爲無能、その父母の恩に報ゆること能はず、その師
長の恩に酬ゆること能はざる者あり、況や至尊の慈育に報
い、國家が生を成す所以に酬ゆることをや。朝に起きて而
して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、

かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。又その無能かくまで甚だしきに至らず、何らか一種の事に従ひ、君國に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、これを前の醉生夢死する者に比すれば勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは纔かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に徳し、その流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、その畢生の事業は以て我等が父母師長、君國、社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは實にこれに外ならず。それ、生きて一郷の爲に功ある者は死して一郷の爲に惜しまれ、一縣の爲に盡くせる者は一縣の爲に哀しまる。若しそれ、そのなす所至尊の聖治を贊し、國家の進歩を助成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝものに至りては、その事業の何たるを問はず、その人の存否は君國社會の進運に關すること甚だ大なるものあり。これを以て、その人一たび逝

